



熟女禍

じゆく

じよ

か

く熟女にされた俺たちはく

まさか友達がある日突然長身爆乳巨尻デブ腹の淫乱熟女経産婦と化して登校してくるだなんて...
.....え？ 俺しかそれに気付かない！？

**罪なき男子たちを襲う
戦慄の熟女化TSE！**

「そうです！あの女です！！」
俺が叫ぶと「そうじゃない！あっち事だ！！」
と正面を指すT先輩

(中略)

Tさんはそう呟くと車の窓から上半身を外に出し、
狙いを定め「破あ—————！！」と叫んだ

するとTさんの両手から青白い光弾が飛びだし、
女の霊を吹き飛ばした

「これで安心だな・・・」

そう呟いて片手でタバコに火をつけるTさん。

寺生まれってスゲー・・・その時初めてそう思った。

—————**原典及び初出スレッド、共に不明**

『寺生まれのTさん』 ネットロアより

**文章引用：『寺生まれのTさんまとめ@wiki』より、
【赤いワンピースの女】**

<https://w.atwiki.jp/>

[teraumare/pages/15.html](https://w.atwiki.jp/teraumare/pages/15.html)

わい
わい

みんなおはよー！
夏休みどうだった？

遊び足りねえ！
もっと休みくれえ！

肌がヒリヒリする…

ガヤ
ガヤ



…つたはあ——ツ！
終わったあ——ツ！


なにが？

宿題！

マジかよ！
翔（カケル）は
絶対やってないと
思ってたのに…

^^
^^
^^
……





さて……

悠馬(ユウマ)に
貸してもらった宿題
返さないとな……

いやあ……
まさか全部写すのに
今朝まで掛かるとは
思わなかった……

——夏休み明けに別人になって登校してきたやつを見たことがあるか？

たとえば外で遊び過ぎて真っ黒に目焼けしてしまったあげく

まだ夏休みテンション引きずってるせいでラテン系みたいに陽気なやつ。

肌が弱いせいでうまく目焼け出来ず真っ赤に腫れ上がった皮膚から薄皮をピリピリ剥ぎつつ涙目になってる可哀そうなやつ。

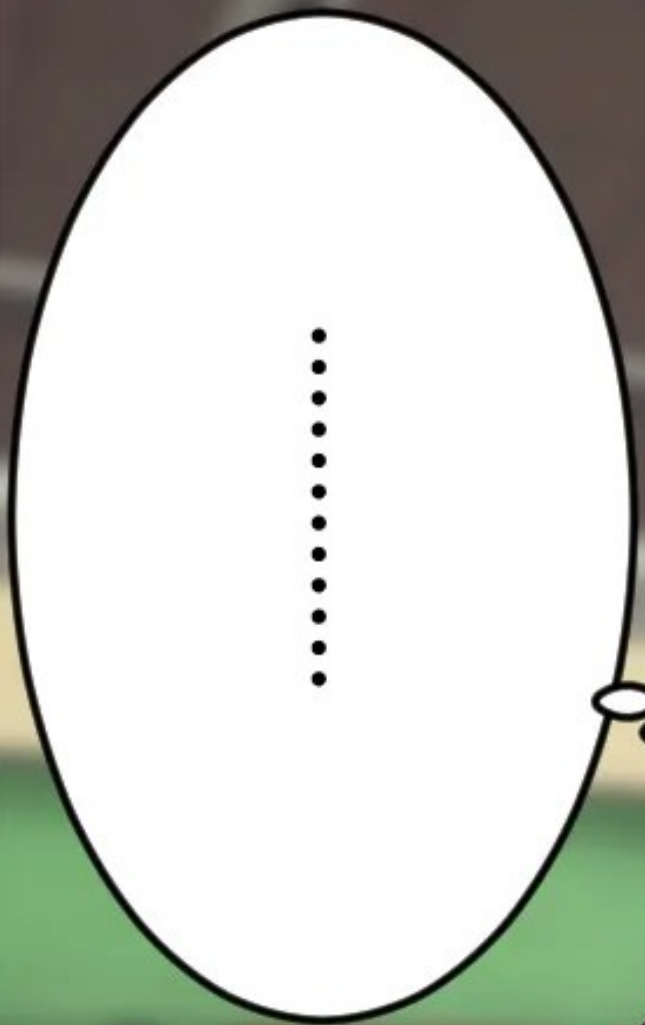
プールサイドでひっくり返って骨とか折って救急車に運ばれた結果、身体中包帯とギプスでミイラみたいになってるやつ。

死にそうな顔で机に視線を落としながら常に小声でぶつぶつと

「今すぐ学校爆発しねえかな……」とか呟いてる、宿題終わってないやつ。


まあこれは数日前までの俺のことだけど、ギリ間に合ったのでセーフ。

とある友人の助けもあって、俺は宿題のダークサイドに落ちることなく無事に新学期の始まりを迎えることが出来たわけなのだが……



ooooo





宿題？
かまわないよ！

こっちこそ……
今日は誘ってくれて
ありがとう！



えらく登校遅いな
悠馬のやつ……

もうホームルーム
はじまつちまうぞ？

そいつ……悠馬は、まあいわゆるクラスの優等生ってやつで
夏休みのあいだも塾だの夏期講習だので忙しそうにしてたんで
他の奴らみたいになしようなもない夏休みデビューなんかとは無縁なまま
前に会った時と特になにも変わらぬ風貌と振舞いで
なにごとくもなく再会できるものだと思っただけけれど。

けれど。

けれど。

けれども。



がららっ

あ！
悠馬くん、オハヨー！

お、来たか
悠……



!!.....?



どよん...



悠馬くん
元気ないね...?
大丈夫...?

おはよう...
ちよつと
身体がおもい
だけだから...
大丈夫...

入口の引き戸が開く音と同時に教室へ足を踏み入れたその人物の異常をクラスの誰も彼もがごく当たり前のことにように受け入れた。

彼はそんな異常なクラスメイトから投げかけられる挨拶のひとつひとつを律儀に返しながらも、居心地の悪そうに自分の席へ着いた。

俺は隣の席で目を丸くしながら彼の顔を見つめていたと思う。

彼はそんな俺の表情を目にして、

きつとこのクラスで俺だけが彼の状態を――

この異常な状況を認識していることに、気が付いたんじゃないかと思う。






ふうう……

あ、おはよう
翔……

宿題ちゃんと
写せた？



え？



…かける
もしかして
まさか…

……
……
……みえてる??







僕の…

…燃のい

俺の友達、高瀬悠馬はその日。

熟女としか形容することのできない姿で、そこに居た。



じゆく
じよ
か
熟女禍

く熟女にされた俺たちはく

悠馬と最後に話した時の記憶は、八月終盤の登校日にまでさかのぼる。

その時点で、悠馬の見た目や振る舞いに何ら特筆すべきところはないように見えた。

学年でも上位の成績に入る優等生である彼は既に夏休みの宿題をあらかじめ片付け終えていたし、残っているのは絵日記くらいの物だった。

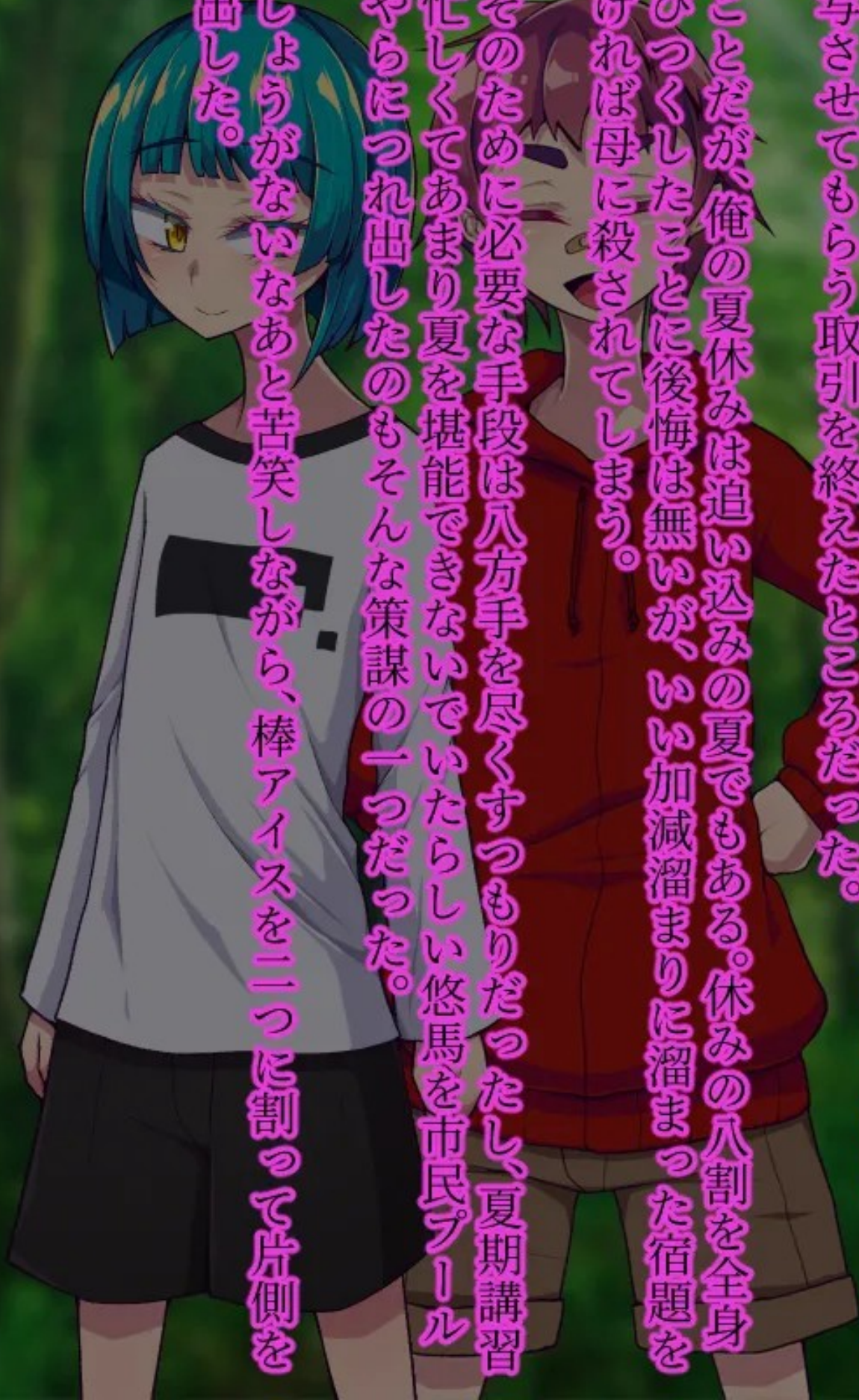


登校目を半ドンで終えたのちに直行した市民プールからの帰り道、俺は地
方スーパーで買い求めた棒アイスを悠馬に奢ることを条件に、宿題ドリルの
一部を複写させてもらおう取引を終えたところだった。

毎年のことだが、俺の夏休みは追い込みの夏でもある。休みの八割を全身
全霊で遊びつくしたことに後悔は無いが、いい加減溜まりに溜まった宿題を
処理しなければ母に殺されてしまう。

だからそのために必要な手段は八方手を尽くすつもりだったし、夏期講習
だ何だで忙しくてあまり夏を堪能できないでいたらしい悠馬を市民プール
やらなにやらにつれ出したのもそんな策謀の一つだった。

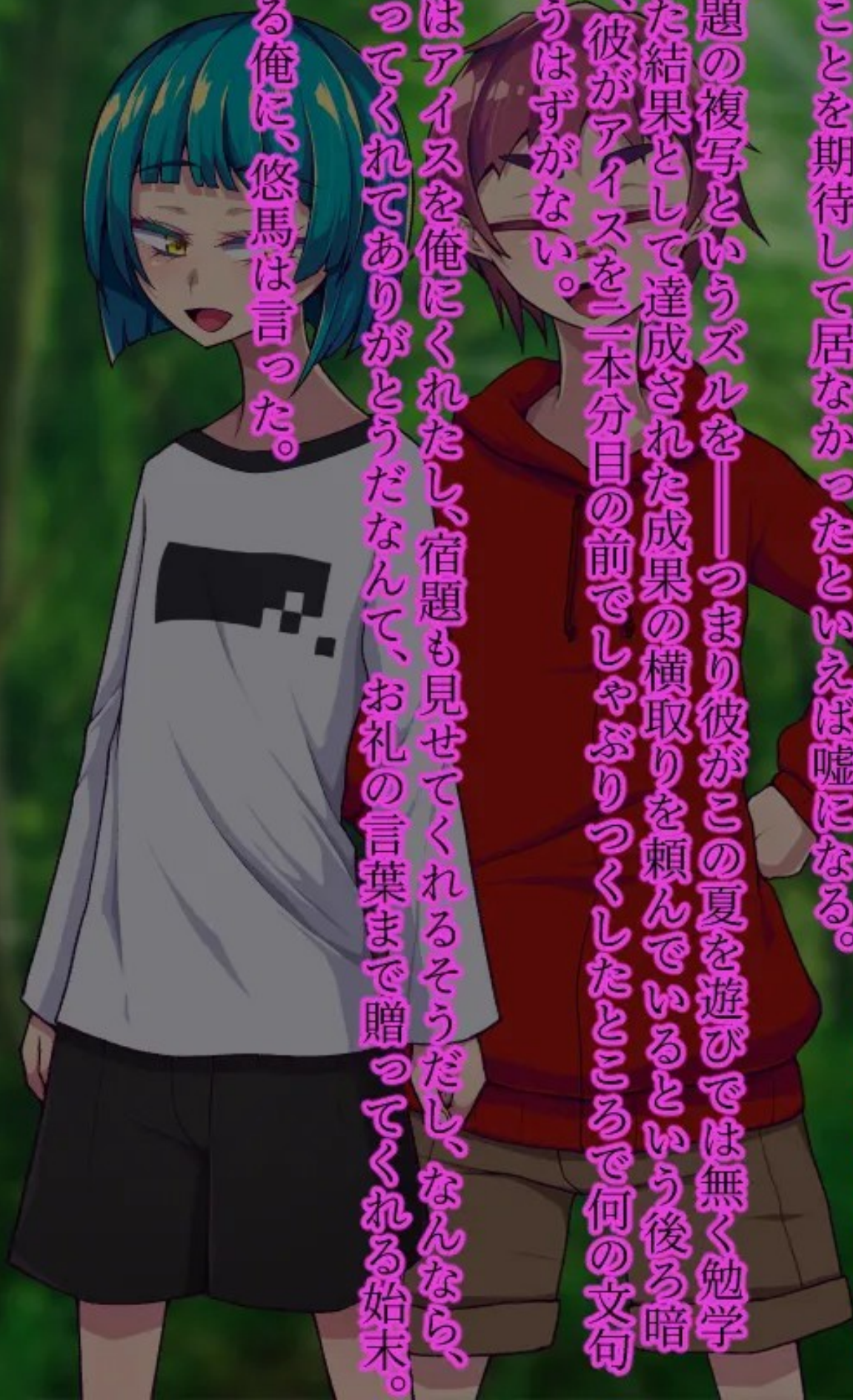
悠馬はしようがないなああと苦笑しながら、棒アイスを二つに割って片側を
俺に差し出した。




キャンデー部分の両端に柄が二本生えたこのアイスは二人で割って食うことを前提とされた作りになっているから、悠馬がこうして半分を俺に分けてくれることを期待して居なかつたといえば嘘になる。

でも宿題の複写というズルを——つまり彼がこの夏を遊びでは無く勉強に邁進した結果として達成された成果の横取りを頼んでいるという後ろ暗い立場上、彼がアイスを二本分目の前でしゃぶりつくしたところで何の文句も言えようはずがない。

けど彼はアイスを俺にくれたし、宿題も見せてくれるそうだし、なんなら、今日は誘ってくれてありがとうだなんて、お礼の言葉まで贈ってくれる始末。恐縮する俺に、悠馬は言った。





夏らしいこと
何もできて無くて
絵日記のネタに
困ってたんだ

だから……
お互い様だよ

なんて出来たヤツなんだ、と思った。

悠馬みたいな優等生なら絵日記なんて「勉強してました」の一言で四十ページ埋めたところで先生も何も言っただろう(まあ事実だし)に、俺が宿題を写すことに罪悪感を覚えないうようなこんな気を遣った言い回しを使ってくれるだなんて……

俺は涙を吞んで、宿題ドリルの複写作業に専念した。おかげさまで俺は無事母親に殺されることなく夏休みを終えれたし、悠馬との友情もより深まった——

——と、思っていたのだが。


なんて出来たヤツなんだ、と思った。
悠馬みたいな優等生なら絵日記なんて「勉強してました」の一言で四十ページ埋めたところで先
が宿題を写すこ
つてくれ

事
俺

は無
ぶっ

翔 ?

——と、思っていたのだが。



翔…？

ねえ、ちやんと
話、聞いてくれてる？



3-7

3-7

3-7

30 30 30 ...



翔…?
?

ゆずっ

おっさん
おっさん

俺はとんでもない姿になってしまった友人を上から下まで観察した。

むちむちとして張り裂けんばかりの脂肪に覆われた脚が持ち上がるたび、巨大な尻が――

――セルライトの凹凸に塗れた、さながら肉の山脈とでも称すべき皮下脂肪の塊が――

――ぶるりと揺れて、凄まじい迫力で俺の視界を占有している。

もしもあの尻の下に敷かれてもしたら命は無いだらうな……



たるみを帯びた皮膚に覆われた下腹部は、貯め込んだ脂肪によってぽっこりと膨らみだらしく垂れ下がっている。

それに、遠目には目立たないので今まで気付かなかったが……皮膚のうえに走る無数の亀裂のような痕は……まさか、妊娠線というやつだろうか？

まるでむかし子供を産んだことのある女性のような……



乳房だって並みの
大きさはじゃない。

熟し過ぎた瓜のよう
に胸元から垂れ下がる
爆乳は、悠馬が身じろぎ
するたびにぼよんぼよ
んと揺れて、跳ねて、ゆ
さゆさぶよぶよと変形
しっぱなしで……

俺はさつきから視線
をくぎ付けにされっぱ
なしだ。

それに、あの乳輪！
俺の母ちゃんみたいに
真っ黒だ……



凄まじいのは乳輪だ
けじやない。乳首も真っ
黒で図太くって……
俺の指なんかよりも
ずっと太い！

下手をするとペット
ボトルのキヤツプぐらい
あるんじゃないのか？
こんな巨大なできもの
みたいな膨らみが、悠馬
のシャツを押し上げ、
歩くたびに擦れ続けて
いるらしい。

そう聞いた俺はもはや
絶句するしかなかった。
だって、こんなこと……
あまりにも想像の埒外だったから。

ハハ

ハハ



目の前の女性は悠馬だ。
その面影からも、振る舞いからも、話す言葉も、俺の友達の高瀬悠馬に他ならない。

しかし、目の前の友達はこれまたどうしようもなく熟女だった。

彼が口を開くたびにっつややかでぶっくりとした唇が震えてドキドキしたし、身振り手振りを交えるたびに揺れ動く大きな乳房や腹の肉や尻の肉や太ももやなにやらが視界の中で遊ぶたび、俺は自分の心臓が早鐘を打ち続けていることを自覚した。

悠馬は悠馬だ。俺の友達だ。

けど、けれど、けれども——熟女の友達なんて初めてだから、俺はもう本当にどうにかなってしまっそうだった。

自分の母親にも、友達の母親にも、こんな気持ちを抱いたことはなかった。胸がざわざわと騒いで、顔がカーッと熱くなって、不思議な事にちんちんがとても固く痛くなっていた。

この前までなんのてらいも無く話していた友達が、俺と同じ年で同じ性別の友達が、まったくもって完璧に別の存在に変貌してしまった姿で俺の前に居る。

その事実があまりにも衝撃的過ぎて、俺は悠馬がどうしてこんな姿になっ
てしまったのかについての経緯も、話半分にししか聞いていなかった。

だから俺のこの理解は正確性に欠けるところがある。
けれど、太筋では間違っていないはずだ。

悠馬は魔女に出会った。
そして、呪いを掛けられてしまったのだ。
熟女になってしまおう呪いを……



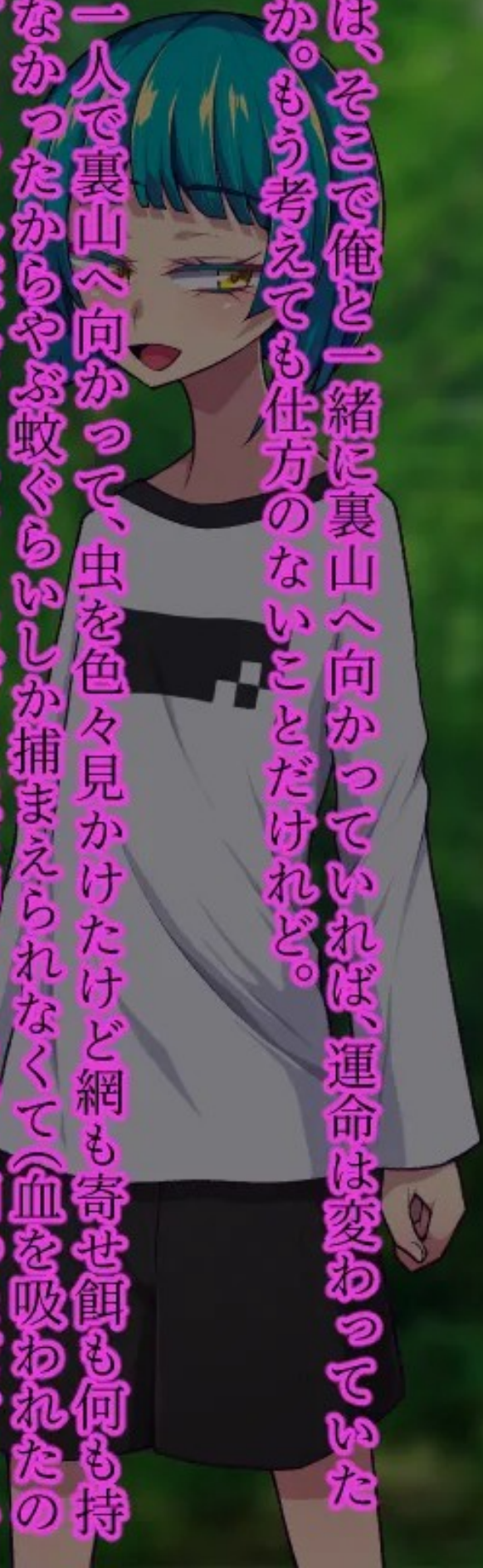
登校日、宿題を借り受けた俺が悠馬と別れた後のことだ。

夏期講習も登校日の目にまでは行われぬ。悠馬にはほんの僅かだけれど夏休みを楽しむ時間が出来た。その結果、悠馬は学校の裏山に向かった。一度、昆虫採集というヤツを試してみたかったんだそう。

地方スーパーで俺がアイスを買う傍らで、あいつは虫かごを買い求めていた。本当は俺にも一緒に行かないかと誘うつもりだったらしいけれど、先に俺が宿題にてんてこ舞いな話を切り出したから、その追い込み作業を邪魔するまいとして口をつぐんだらしい。水臭いやつだ。

あるいは、そこで俺と一緒に裏山へ向かっていけば、運命は変わっていたのだろうか。もう考えても仕方のないことだけれど。

悠馬は一人で裏山へ向かって、虫を色々見かけたけど網も寄せ餌も何も持ってきてなかったからやぶ蚊ぐらいいしか捕まえられなくて(血を吸われたので潰した、ともいう)、汗だくになりながらただ山をうろつき回っただけという結果に落ち着きつつも、勉強以外のことで夏を堪能できた事実に対してそれなりに満足しながら帰途に就こうとして、





はっ、はっ…
あせ、かいちや
つたな…

そろそろ家に
帰らないと
ママに怒られ



ちや……？

≡" ㄱ≡" ㄱ≡" ㄱ

ㄹ ㄹ ㄹ ...

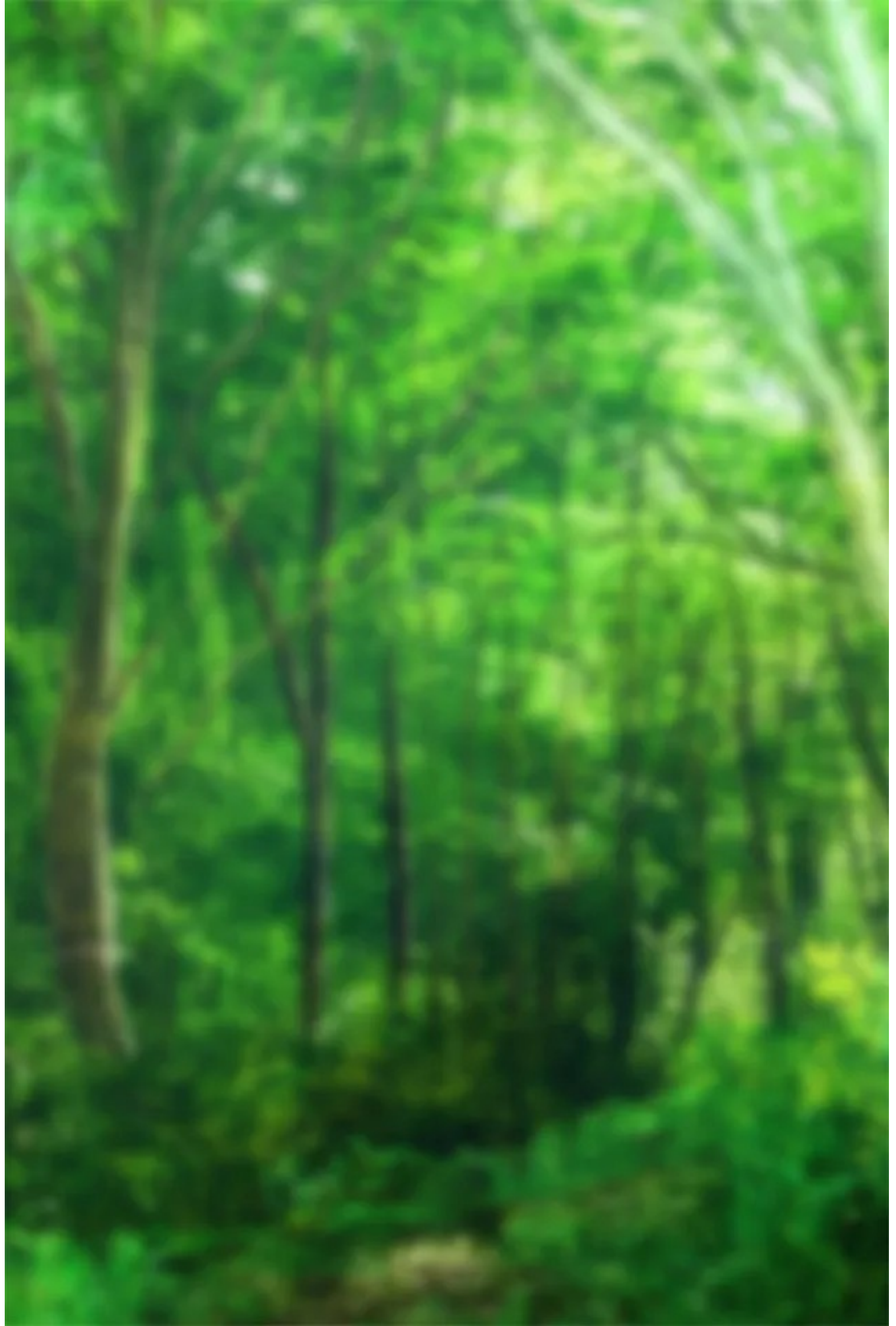


それは、まるで夕焼けに伸びる影のようだった、と悠馬は語る。

そろそろ太陽が山の向こうへ沈もうという頃、逢魔が時と呼ばれる時刻。

それは。





カキカキカキカキ

カキカキカキ...



しーしーしーしー

しーしーしー...





気のせ

♪♪♪...

♪♪♪...



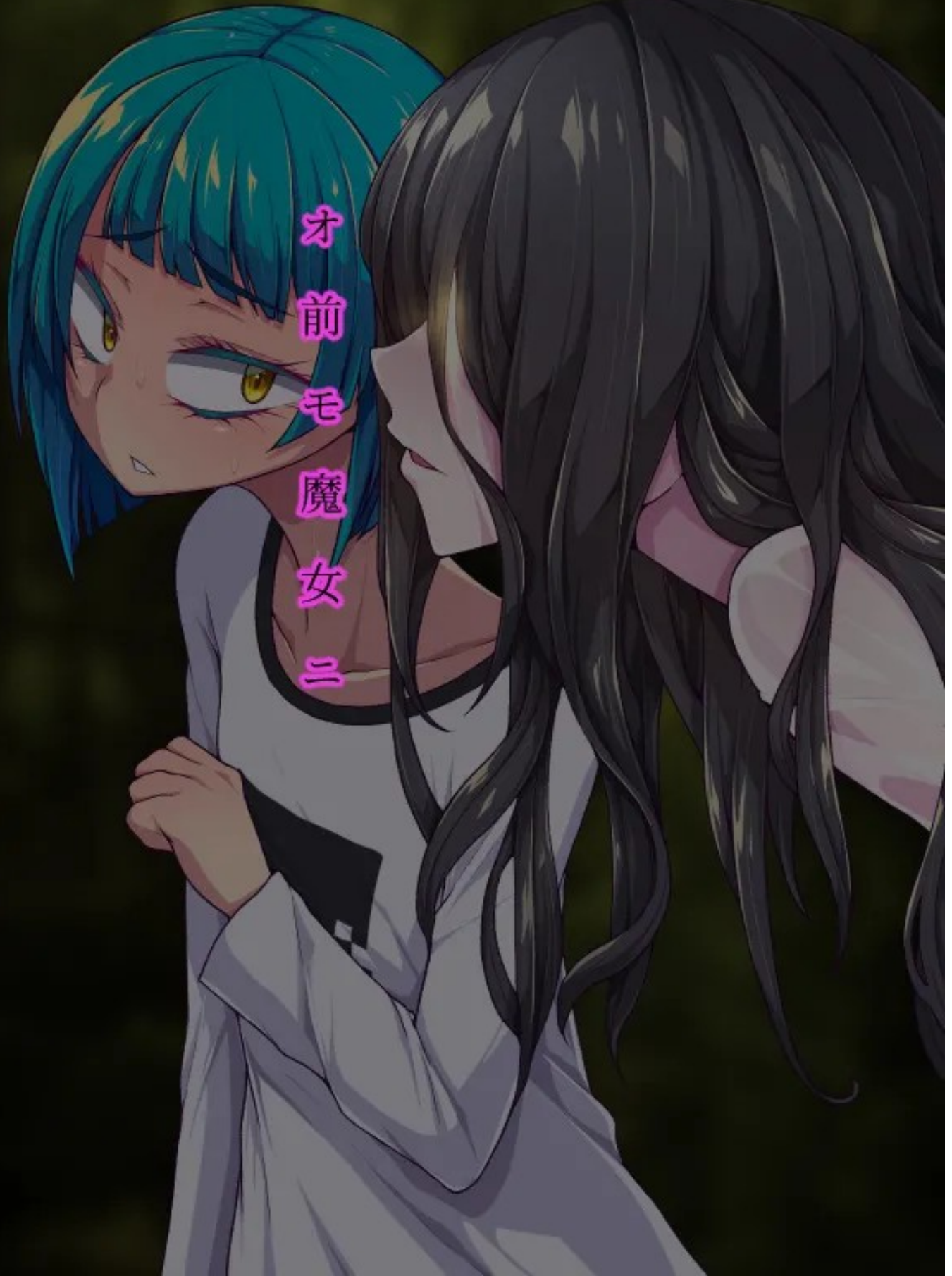
♪♪♪...

♪♪...




おっおっおっ...

おっおっ...



才前毛魔女ニ



あつ…
ああつ…

う…
う…
!?

ゴキッ

あぐっ!?
身体が…

ベキッ

ボキッ

あっ…
ああああっ

う…
うああ…

げ
げ

な…
なにが…？

ハア
ハア

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ



え...？

ぽよんっ

汗だくで身体に張り付いたシャツとズボンの下で、悠馬の肉体がみるみる内に変貌していった。

ま、待って！

僕の、僕の

か足が青竹みだいに太くなって、膨らんだ尻に押されてズボンの裏側が裂け始めた。

からっ……

ああっ

ああああっ

肋骨がごきごきと音を立てて胴が伸び、腹の肉が急速に弛んでいった。

乳房も一度パンパンに腫れあがったと思ったら、急速にその形を崩してその先端が指す向きを変え、重力に従うようにして垂れ下がっていった。

キッ

キッ

メキッ

ビキッ

プキッ

ムキッ

ギキッ

だんんん

ちゅちゅちゅちゅ



う、うそだ…

そうだ。
そのすがたは、

ぼぼ：
ぼくの身体
があああ！

ムチッ

ムチッ

ムチッ

ムチッ

ブヨ

オオ。。。

ムチッ

ムチッ

ムチッ


まるでついさっき目の前に現れ、背後で囁いた存在——
「魔女」に、そっくりだったのだ。

……少なくとも、その体型の非常識さに関して言えば、だろうが。




魔女の気配はそれっきり消え失せてしまった。
後には、熟女と化した悠馬が残った。






：いろいろ
聞きたいことは
あるけどよ…

家族とかに…
相談したりは…？



どうやって
説明すれば
いい…？

翔以外誰も…
僕のこの姿に
気付いてくれ
ないのに…



そうか…
そうだよな…

こんな
荒唐無稽なこと…
相談出来るトコ
なんて…





…なんだよ悠馬

俺…なんか
おかしいこと
言っただか？




いやその…

『荒唐無稽』なんて
熟語が翔の口から
出てくるとは
思わなくって…

ばっ、
馬鹿にすんなよ！
俺だってなあ…

勉強してんだぜ！
いっつもお前に
頼ってばかりじゃ
悪いって思うし…




はははっ
ごめんごめん！

それじゃあ：
来年の宿題はもう
見せなくつても
大丈夫そうかな？

あつ
いやそれは
その…

今年みたい
に
つい後回しに
しちゃった時…
死んじゃうから…
そのお…



とっ、
とにかくく!

いろいろさ、
調べてみようぜ!
元の姿に戻る方法が
無いってこたあ
ないだろうし!

荒唐無稽な
トラブルならさ…
荒唐無稽な解決法が
どっかにあるかも
しれねえだろ？

だからさ…
あんま
落ち込むなよ？
…な？



翔
...

...ありがとう



へへっ

気にすんなよ！
だつてさ、
俺たち……………

きゅん

きゅん

どろどろどろ...

友達だ...ろ...?



ぽ

る

ん

ooooo

はあ

はあはあはあ...

はあ

はあ

はあ

はあ

はあ

カケル...

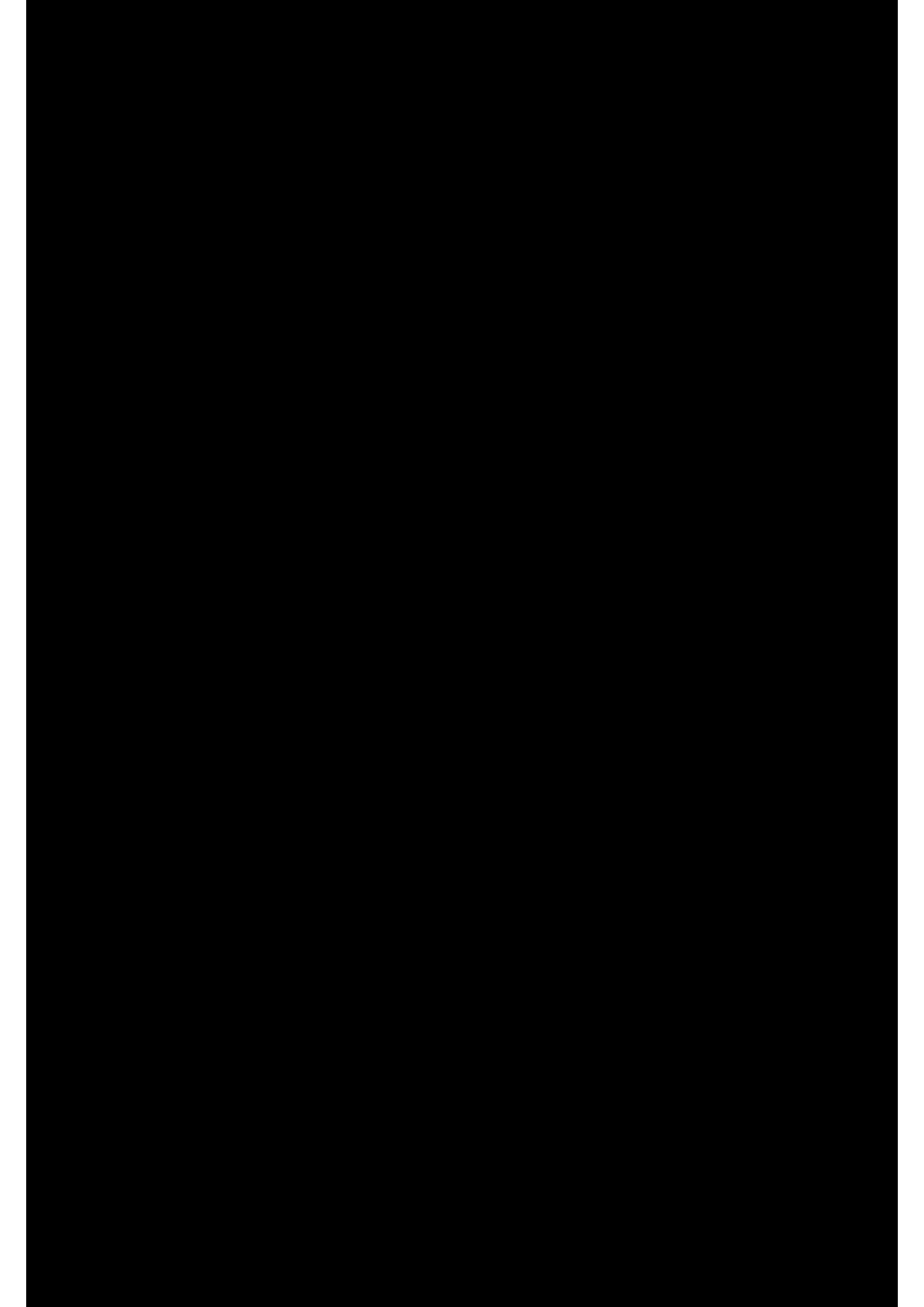
んん

んん

んん

んん





おっ

おっ

おっおっおっ...

ひっ…
なんだこれ…
おっばい…？

ど…
どうしよう
こんな姿で…
僕…これから…

かかか...

ささ

ささ

家族にも...
なんて
言えば...

はあ

はあ

ムム...

ムム...



カ
カ

カカカ...

カ
カ

.....

はあ

はあ

はあ

はあ

アハハ...

アハハ...

ハハハ...

ハハハ

ハハハ



カカカカ...

カカカカ...

カカカカ...

なんだこれ...
手...止まらな...



ズズズズ...

ズズズズ...

ズズズズ...

ズズズズ...

ズズズズ...

ズズズズ...

ズズズズ...

ズズズズ...

ズズズズ...

ズズズズ...

ズズズズ...

ズズズズ...



おどおどおど...

おどおど

おどおど

あつ...ああつ...
おつぱい...
せつな...あんつ...

おどおど

おどおど

おどおど

おどおど

おどおど

おどおど

おどおど

おどおど

おどおど

おどおど

おどおど

おどおど

はあ

はあはあはあ...

はあ

あつ
あつ
あつ
あつ
あつ
あつ

はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
はあ
はあ

はあ

はあ

はあ

はあ

はあ

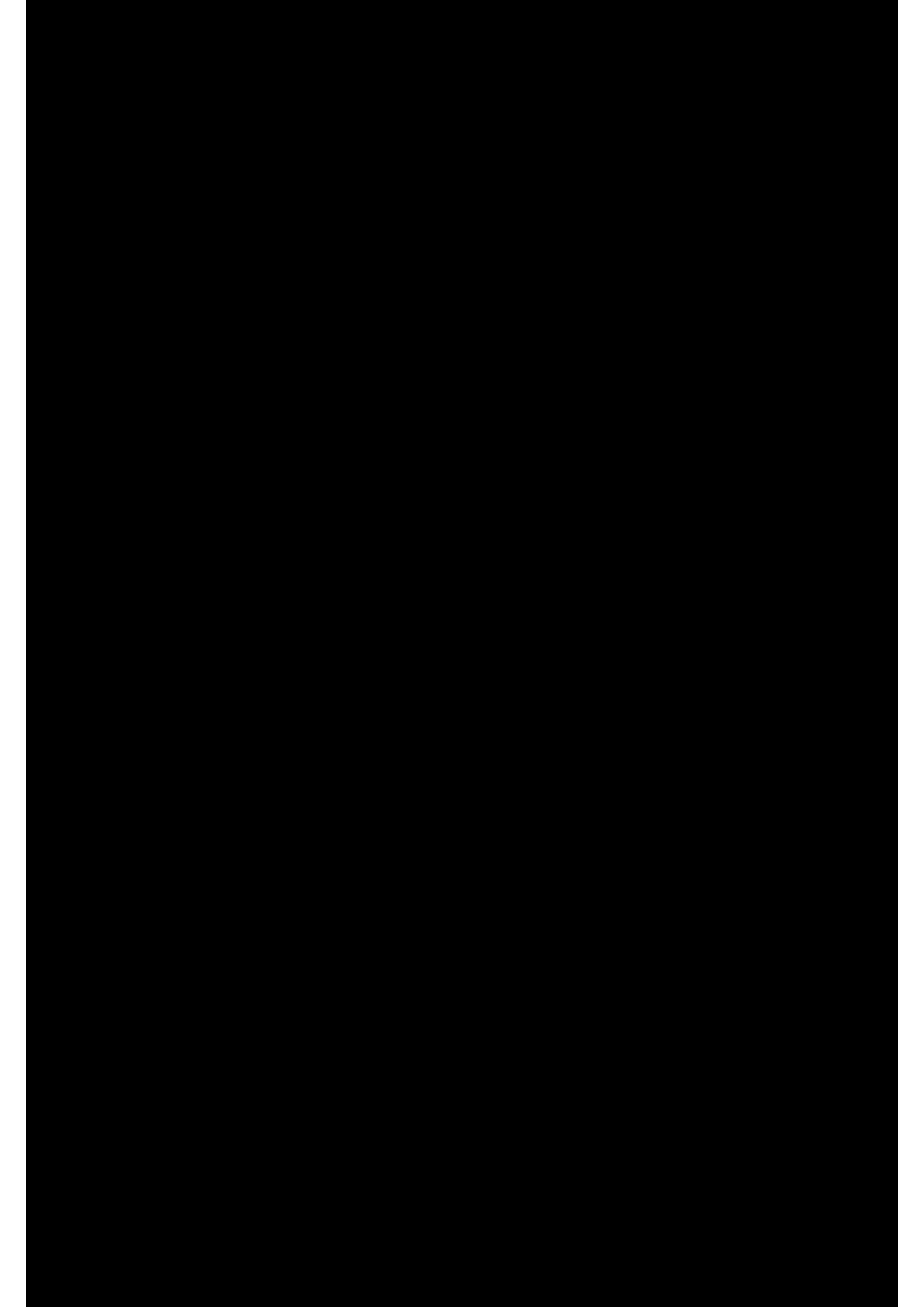
はあ

はあ

はあ

はあ

はあ



あっ

アッ

キーンゴーン

カーンゴーン…

わい

昼休みだ！

わい

図書室行こ…

ガヤ

ねむ…

ガヤ



翔？
気分でも
悪いの？



いや、
大丈夫
大丈夫だよ

ただ色々と…
考え事を、な

俺たちは連日話し合った。

休み時間、放課後、家に帰ってからもスマホで――

けれど解決策は見つからなかった。

当たり前だ。どうしてこんな超常現象としか言えないような事態を、俺たちみたいなきごくごく平凡な二人が解決できる？

だから俺たちは最終的に、あの山へまた向かうしかなかった。手がかりがあるとしたらそこしかない。

この結論に至るまでは、けっこう時間がかかった。だって、もっと悪いことになる可能性の方が高かったからだ。

またあの魔女に出会えば、悠馬はさらにひどい目に遭うかもしれない。俺だって無事じゃすまないかもしれない。


けど、悠馬は友達だった。

この連日の濃密な話し合いや触れ合いを通して、俺はこの友人のことをさらに深く知ることになった。

見捨てることなんてできない。

こいつを放つといたまま、俺だけ日常に戻るなんて、とても。





おい、翔？
サッカーしないか？


お、いいな
じゃあ……

!



ぽよっ
……





ごめん！
ちよつと僕ら
このあと
用事があつて…

だよね？
翔…？

ああ…
あ…

悪いな…
また今度…
な…

そう、悠馬は友達だった。



友達、だったんだ



お：おい：
どうしたんだよ
急に：

ア

ム

ム

ム

ム



あんまりさ…
教室でああいうこと
されるとよ…
その…



困るっていうか…



ごめんね…
また…
我慢が…
効かなく
なつてさ…

悪いんだけど…



!

く

ばあ

あ

お願い…





びびりビラビラが…
またはみ出して…

じいっ……

にちやあ……



...하...

...하...
...하...

...하...

...하...

...하...
...하...

...하...

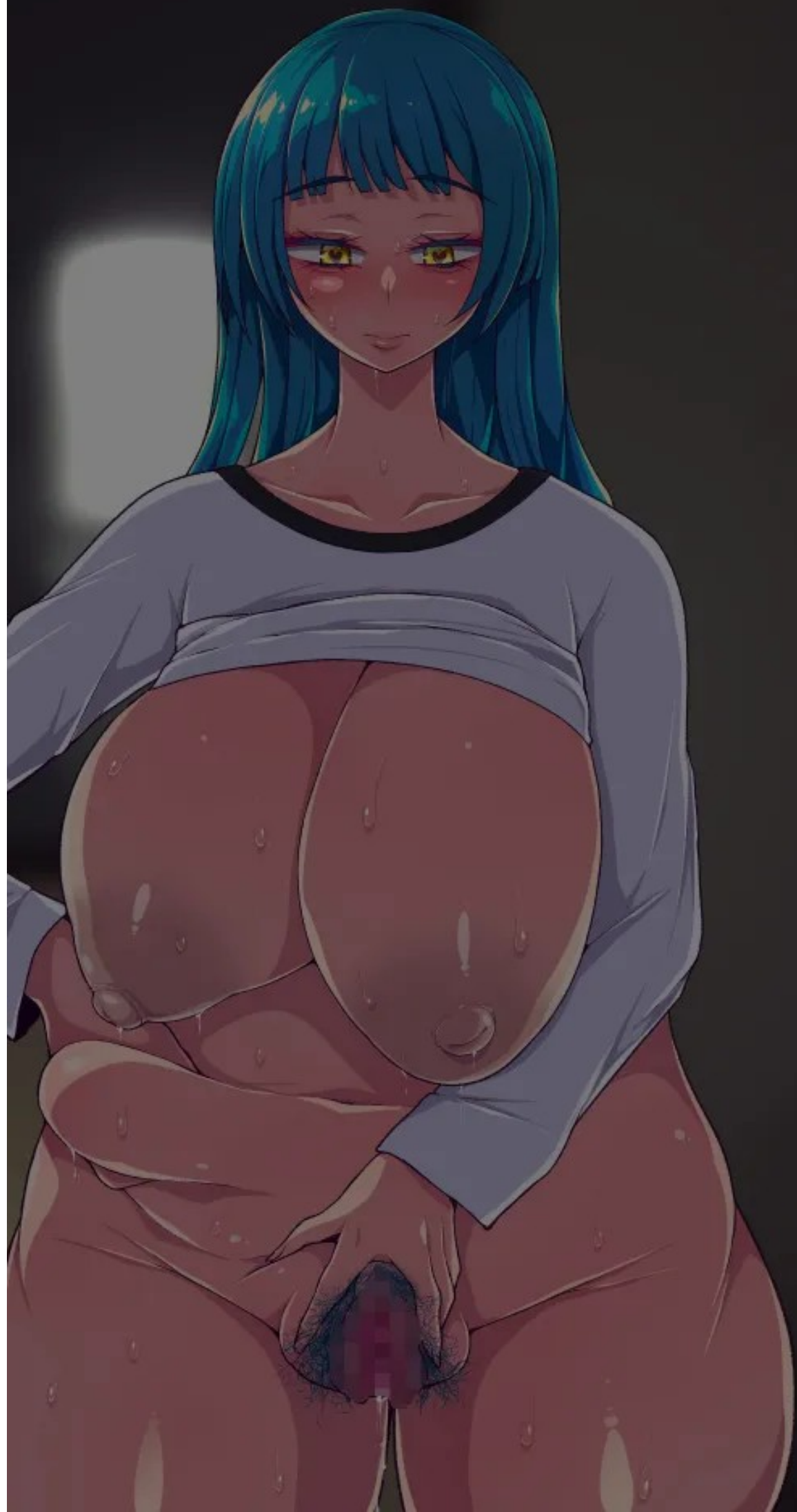


しょうがねえな…



俺と悠馬は肉体関係を持っている。

たぶん、恋人と言って差し支えないんだろうと思う。
俺たちは何かにつけて二人きりになって、悠馬の身体を元に戻すための
実験という名目で、色んな事をした。その大半は、決して人に言えないよう
なことばかりだ。



悠馬の肉体はいつも汗ばんでいる。
ふにふにと柔らかい脂肪を包み込む皮膚はあまり弾力があるとは言えないけれど、その表面に伝う汗の香りはいつも甘ったるい匂いがして、俺は悠馬の体臭を嗅ぐたびに勃起が抑えられなくなる。

せーしー……

体臭はとくに腋や股間が物凄い。
うかつに顔を近づけると目に刺すような痛みが走るほど刺激的な香りを、
俺はいつも手で仰ぐようにして自分の鼻孔へと誘導する。
理科の実験で習った劇物の嗅ぎ方だ。
まさしく、悠馬の全身は劇物といって差し支えないほどの大人の魅力に
満ちている。

むわ



けど、その肉体の持ち主である悠馬自身は俺と同じ年の同級生に過ぎない。その熟れた身体をいつも持て余していて、ちよつと目を離すとトイレの個室で自分の乳首や股間をまさぐっている。



その表情は……大抵の場合、必死そのものだった。
無限に湧きあがる行き場のない衝動……つまり、性欲、に……
ひたすら、苦しみ続けているように見えた。


だから俺は、そんな友人の姿が見てられなくて……

あーうーあー



そうだ。
最初の一回は、俺の方から誘ったんだっただ。





いつものように学校のトイレで我慢できずにおっぱじめていた悠馬に、俺はセックスをしてみないかと提案した。悠馬は名案とばかりに何度も頷いていた。ようやくこの生き地獄に一筋の光明が見えたかのように顔をほころばせていて……





あつ…
ゆっ、ゆうま…
おれ…もう…!!

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

あつあつ


あつ

あつ…
あつあつ!

あつあつ








……けど結局、俺たちは初めてのセックスをぎこちなく終えることになった。

俺のちんちんじゃ小さすぎて、悠馬を心の底から喜ばせることが出来なかったからだ。



これじゃいけないと思った俺は、親父のへそくりをこっそり拝借して色んな玩具を買いあさった。

もちろんんそういう店に入るのは俺も悠馬も無理なので、ネット通販を使ったりだとか、いろいろと苦労する必要はあったが……

だが、その甲斐はあった。

俺と悠馬は肌を重ねるたび、互いが互いに与え感じる快樂の海に溺れて行った。



だ、大丈夫か……？
こんな大きい
ペニスサツク
なんて……

ヒッヒッ
ヒッヒッ

ううん、大丈夫
すつごく…
気持ちいいよ

カケルこそ…
疲れたんなら
休憩しても
いいんだよ？

あッ
あッ

な…
舐めんな…

舐めんな
舐めんな





このままじゃマズいんじゃないか、と途中で考えなかつたわけじゃない。だがそんな思考は、浮かび上がるたび泡と消える。

この関係を捨てられようはずもない。

世界にはこんなにも男と女の肉体を堪能するための愉しみに溢れているって、俺たちはこの歳にして知ってしまったのだから……

準備体操おー！
いーち！

俺たちは昼休みも放課後も愛し合っただし、

なんなら授業中にだっってお互いのことを考えていた。

さーん

しーい

ムチッ

ムチッ

ムチッ

ごーお



体育の授業の着替えのたびに悠馬はその肉体を俺に見せつけるようにして着脱していたし、マラソンやスポーツでその豊満な肢体が躍動的に揺れ動く光景は俺にとって生のエロ動画みたいなものだった。

ムチッ

ムチッ

ごーお



俺たちは運動中にも隙を見つけては互いの身体へ
過剰なスキンシップを行ったし——



あ

ん

ムチッ

モミモミ

ん

しーち



はーち

—何ならクラスメイトに隠れながらお互いに
自慰スレスレの行為を見せつけ合っては、心を昂らせていた。

きゅー



もちろん授業が終わったあとと少しでも時間があればセックスをした。

うーう

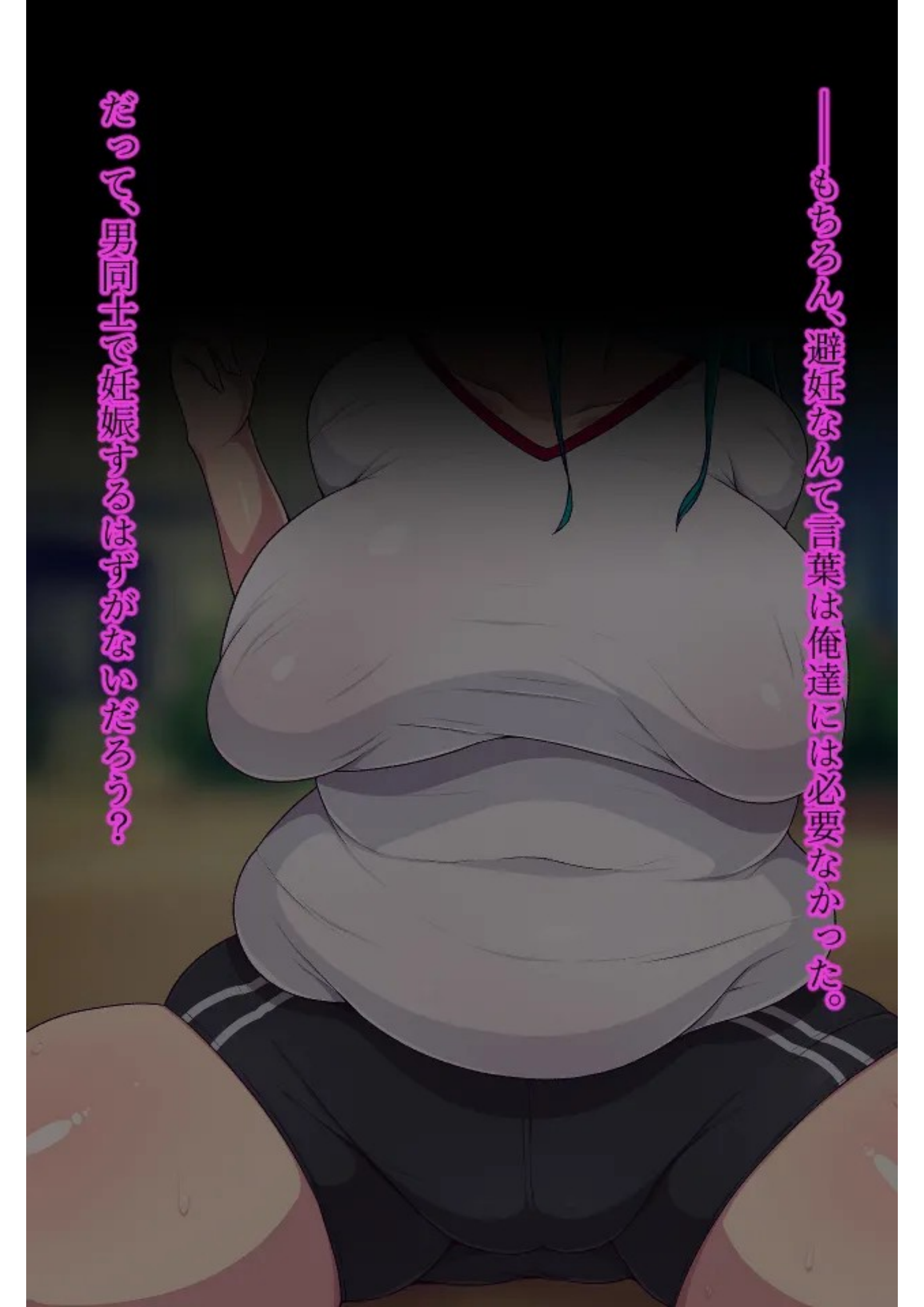
んんん

んんん

んんん

んんん





——もちろん、避妊なんて言葉は俺達には必要なかった。

だって、男同士で妊娠するはずがないだろう？



十一月





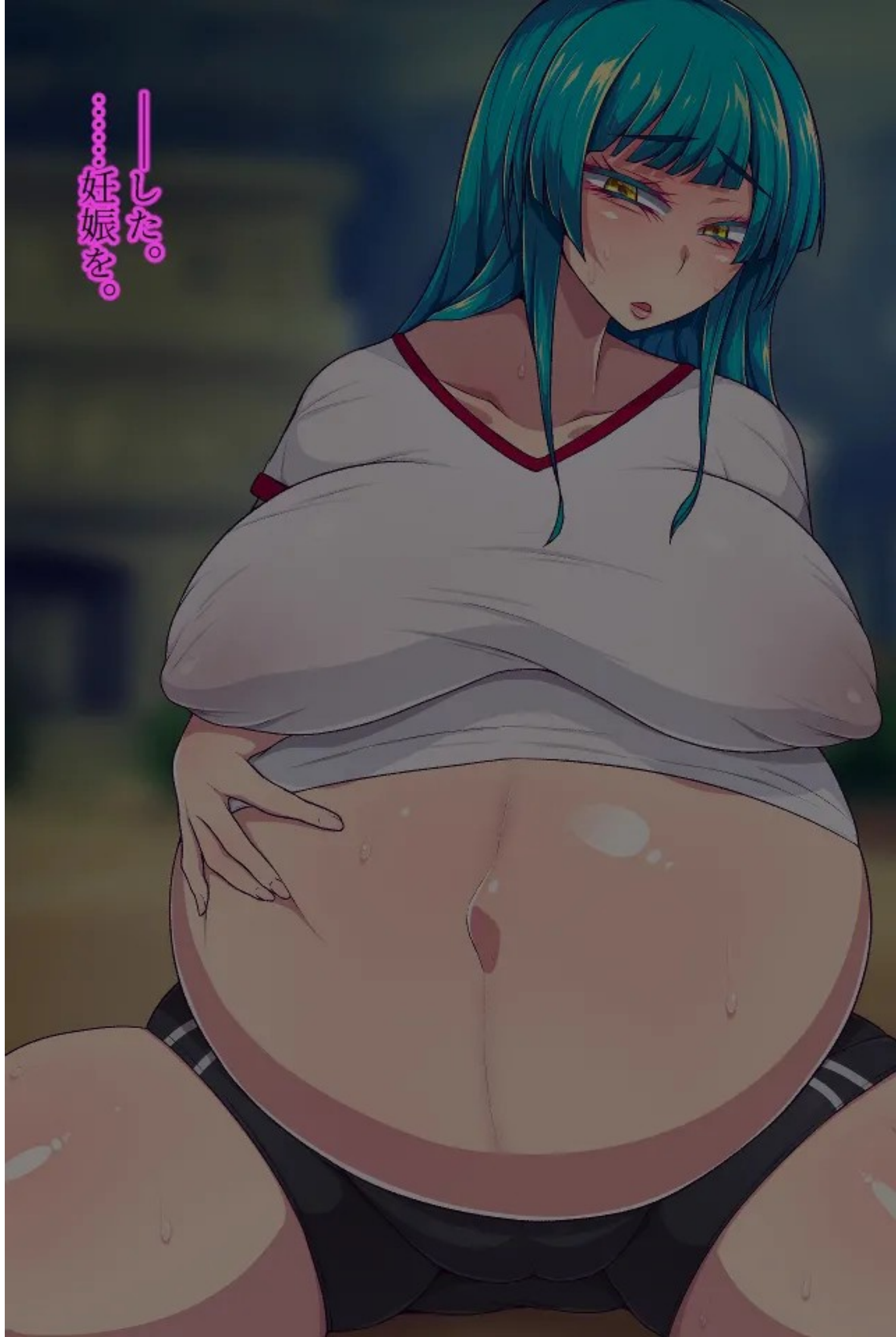
うあ

はあ
はあ

ほてっ

...

……
——した。
妊娠を。



翔う…

ムチ

ムチ

ぼてっ…

ぽん



悠馬の発育は止まらなくなっていた。

セックスを重ねるたびにその身体はますます大きく蠱惑的に変貌していったし、俺たちはもはやセックスを我慢することなんて出来やしなかった。

そしてそんな爛れた性生活を象徴するかのようにして、

悠馬の腹もどんどん膨らんでいく。

赤ちゃんの妊娠と出産には十か月程度の時間がかかると習ったはずだが、この二か月で悠馬の腹の大きさは明らかに臨月のそれを越えていた。

悠馬の親が用意してくれる服は元の体格用の物のままだから着用するだけでも一苦労だし、ほんのわずかなことですぐ破れてダメにしてしまう。

悠馬はそろそろ寒くなってきたからと言って親に冬用の大きめのパーカーをねだり、最近はもっぱらそれを羽織っているようだが……

それでもサイズが足りていないのは明らかだし、膨らんだ臨月腹はいつだって秋風に晒されて寒そうだった。

ほて……

ぽん



異常...
だよな...

悠馬も...
俺も...
何もかも...

この木枯らしが俺たちの頭を冷やした。

夏の暑さがもたらした狂乱を終えて現状再確認すると、明らかに俺たちは破滅への道を突き進んでいる。

俺たち男二人の変態的な関係はほとんど学年中に知れ渡っているし、何なら一度セックス現場をクラスメイトに目撃されたことすらある。

ただ、そいつはからかうような口調で俺たちをホモ呼ばわりしてさっさとどっかへ消えて行ったので、どうやら悠馬の肉体と同様に俺たちが行っている性的な行為を周りの連中は認識出来ていないらしい。

だがそれは、俺たちの関係性が永遠に続くことを意味しない。

場所も行為も問わず互いを求めあう俺たちの性倫理はとうの昔に

「普通」の範疇からは逸脱してしまっているし、授業における俺や悠馬の成績も下落の一途を辿っている。

このままいけばたぶんろくな未来は待っていないだろう。

この共依存の先に——俺たちは何の希望も、見いだせてはいないのだから。

俺たちはかろうじてその結論に至り、そしてこの因縁に決着を付けることにした。

つまり、たとえどのような結果に陥ろうとも——
悠馬に起こっているこの異常事態の原因を突き止めて解決する。
突き止められないまでも、何らかの決着を見つける。

曖昧模糊とした目的で申し訳ないが、これが俺たちに出せる結論の
全てだった。

なにせ、裏山に行かない限りは何にも分からないのだから、そのあとの
事なんて考えられようはずもないのだ。


かくして俺たち二人は裏山に足を踏み入れた。
無謀は重々承知のうえ、けれど、それ以外に取る手立ても無いがゆえ——



ခုနဲ့...


ဟဲ့

ဟိန္ဒါ...!!



大丈夫か、悠馬？
冷えるよな…

服も…
サイズ、足りねえ
もんな…



ありがとうございます！
大丈夫…
じゃないけど


耐えれなくは
ないから…

俺はまだいい…
ちよつと頭が
ボーつとする
くらいだし…

けど
悠馬は…

こんな異常を
抱えてること…
俺以外の誰にも
理解されず…

まともにも
生きていける
わけが…



翔！
これ見て！
アイツが
立ってた
茂みの中…

地面に…
扉のような
ものが…



.....

マジかよ...

まるで地下壕の入り口のような鉄扉とハンドルが、木の葉と小石と土にまみれてそこに眠っていた。

俺と悠馬は互いに顔を見合わせて、しばらく話し合ったのち、俺だけが内部の探索に赴くことに決まった。

こういった地下の暗所では酸素量が極端に薄く昏倒の危険があったり、単純に入口が壊れて脱出できなくなる可能性があるからだ。

何かあった時の通報役として悠馬を地上に残し、俺は地下壕の内部へ足を踏み入れた。



地下壕の内部は暗く、目が落ちることに備えて懐中電灯を持ってきた悠馬の機転に感謝することになった。

この施設がいつどこで誰が何のために作ったものなのかは判然としない。

入口こそ鉄製で仰々しかったからなにか旧帝国軍の地下研究所とかそういうエンターテイメント性の高いあれこれを予想したもの、内部はそれほど広くなく、大冒険のたぐいは期待できそうになかった。


壁と天井は石で補強されており、崩壊の危険性はなさそうに見える。防空壕かなにかだろうか？

ここはかつて戦火に見舞われた国だ。そんな施設が残っていてもおかしくはないが……

だがそれにしては。

ここが人の命を守るための施設だと仮定したならば。

ひどく、その存在に違和感を感じる設備が……ひとつ。



これ……
牢屋、だよな

時代劇で観たぞ
たしか名前は……

座敷牢……



.....?
なんか、寒気が...



ガサ

ガサ

…長居すると
マズい気がする

ゴン

ゴン

何か、何かないか
手がかりか、何か…
………あつ！

ガタン

ガチャッ



しまった…
でかいツボ倒して
割っちゃまった



けどまあ
中には何も入って

ない……



その白く細い何かは、壺の下の土から生えて、いるかのように見えた。まるで、植物の新芽が土から這い出し花を咲かせようとするがごとく。

よくよく見るとこの地下壕には、割れた水がめや保存食らしきものの残骸が詰まったずた袋など、明らかに人間を長期的に生存させるためと思わしき食料品の備えがあった。

座敷牢の存在が視界の端でチラついた。

ここは誰かが逃げ込むための場所ではなく、誰かを住まわせ、逃がさないための場所だったのでは？

俺は早鐘のように打つ自分の心臓の音を聞きながら、まわりに置かれたがらくたを片端から順にどけていく。

すると、まるでその悪い予感に應えるようにして、白い新芽が咲いている。土の下から這い出して息を吸おうとするように、何本も、何本もの新芽が。

ああ。

この新芽が何なのか、直感的に理解する。

人間の指にしてはあまりにも細く小さな、
それこそ、人間の『成り損ない』としか思えないような白い骨が、
たくさん、

たくさんたくさん、

たくさんたくさんたくさん、

この地下壕足元の土の中に埋もれ、隠されていたのだ。

俺がその場で胃の中身をぶちまけてしまったことを責めないで欲しい。すぐ真上に自分の赤子を孕んだ友人が待っていることを想うと、好奇心よりも嫌悪感よりもなによりも、とめどない不快感が勝ったのだ。

俺の貧弱な想像力と歴史的知識では、この地下壕が何のために作られたものなのかは分からない。けど、ここで何が行われていたのかだけは分かる。

この座敷牢にはきつと、何度も、何度も何度も、入れ替わり立ち代わり、たくさんの女性が……生活させられてきたのだ。

この地下壕に足を踏み入れた時から孕んでいたのか、いや、あるいはこの地下壕の中で孕まされたのか、分からないけど。

どっちもありえたのかもしれないけど。

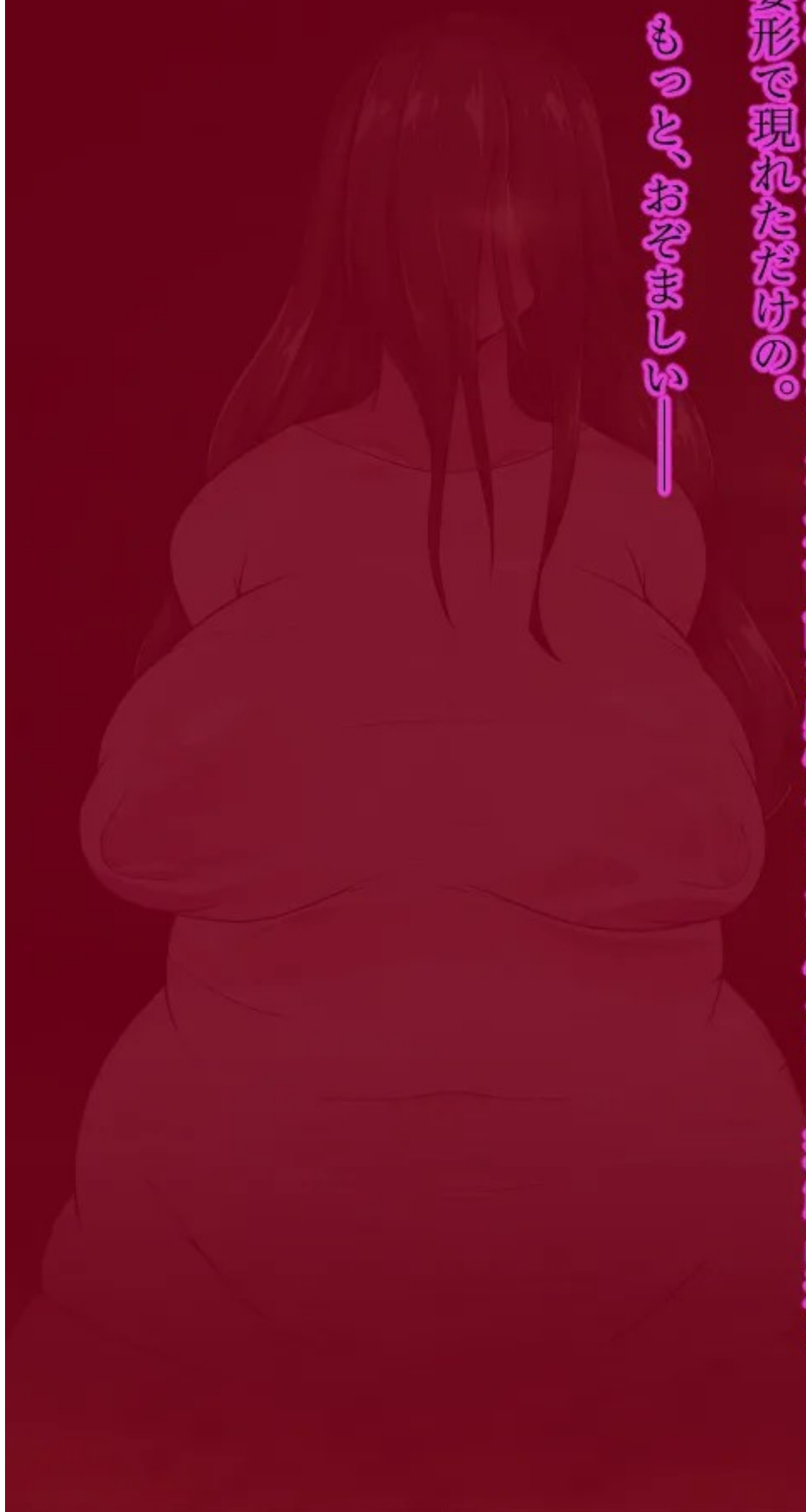
どんな事情でどんな人たちがどんな気持ちで行ってきたことなのか分からないけれど分からないけれど分からないけれど分かってはいけなけれど。

きつとこの場所では俺なんかじゃ想像も出来ないほど凄惨な出来事が繰り返されてきたのだらうことだけは否定しようのない事実として俺の足元から芽を吹き出し続けていてそれで。


俺たちが目にした魔女っていうのはつまり。

この場所にずっと降り積もってきたさういう、『形容出来ないなにか』としか言えない呪いとか叫びだとかさういった想像は出来ても理解なんて不可能な感情たちが、俺たちに理解出来る姿形で現れただけの。

もつと、おぞましい――







ゆう……
……ま?

おまえ、
なんで降りて……









憑りつかれていたのだろうか。

今にして思うと、この夏における俺たちの行動は何かもが異常に過ぎた。欲望に身を任せるうちにドツポへハマリ——それらを断ち切るために奮起したことすら、無意識下でこの場所へ誘われていただけの事なのかもしれない。





かける...
かける...
かける...

はあ

はあ

ムネツ

はあ

はあ

ムネツ

ムニ

ムニ

ムニ...

ムニ...

悠馬の熱に浮かされたようなあどけない笑顔を前にした俺の身体は、まるで蛇ににらまれた蛙のようにカチカチに固まってしまっていた。

悠馬は身重の身体を揺らしながらゆっくりとその衣服を脱ぎ捨てて、俺のまだ未成熟な下半身をめがけてどっしりと腰を下ろした。

暖かく湿った密壺の中に閉じ込められたチンコは、今にも溶けてなくなりそうなほどのじんわりとした快感に包まれている。

妊婦の巨体にのしかかられたせいか、下っ腹しよあが苦しい。ツ
なんとなく下半身の感覚が薄くて、いま自分の身体がどんなことにムシムシ..
なっているのか分からなくなる。

はあ

ムネツ

はあ

ムネモ..

ムネム

自意識がどこか別の次元に向かって浮かび上がるような快感が俺の意識を支配していた。

窒息寸前の恍惚に似たそんな状態が心地よかった。

悠馬と肌を重ねて互いの熱を交換し合いながら溶け合っていくこの時間がいつまでも続けられればいいのにと、この夏に何度も繰り返した。欲望の惰性に心と身体を寄り掛からせて堕ちて行ってしまいたいそうになる。

俺は今自分がどんな場所にいるのかすら忘れながら、悠馬の欲情に応えようとして下半身に力を入れ――

そうしてようやく、己の異常に気付く。^{はあ}ムネツ

はあ

ムニ

ニムモ..

ニムム



あはっ
あはっ
あはっ

ツツツ
ツツツ
ツツツ

悠馬の腹の中から何か流れ込んでく。

得体の知れない熱のような不定形の何か、交わり合った下半身を通して俺の腹の中へ入り込もうとしている。

その何かは俺のチンコを包み、溶かし、さらにその奥へと侵入すべく這いずっている。内臓を押しつけ、産道を作り出し、やがて自分がそこへ収まるべき場所——子宮を、造り出そうとしている。

なんでそんなことが分かるのかって？

語り掛けてくるからだ。

俺の中に入ろうとしてくる何かは、こう繰り返している。

お前も魔女に。

お前も魔女に——

お願いだから。

ブクブク
グクグク
グクグク



ボテヒ...

30/1/4

はあ

はあ

30/1/4

30/1/4

俺が変わっていく。変えられていく。

何か俺の中に入り込んでから――

俺がこの子を孕んでから、まだほんの十数分だ。

しかしたったそれだけの間に、俺の身体はすっかり様変わりしてしまった。

一秒ごとにその体積を増しつつある孕み腹は言わずもがな。

雪が降り積もるさまのごとく贅肉が折り重なり

はちきれんばかりの太ももに、中にクツションでも詰め込んでるのかと思いたくなるようなデカ尻。

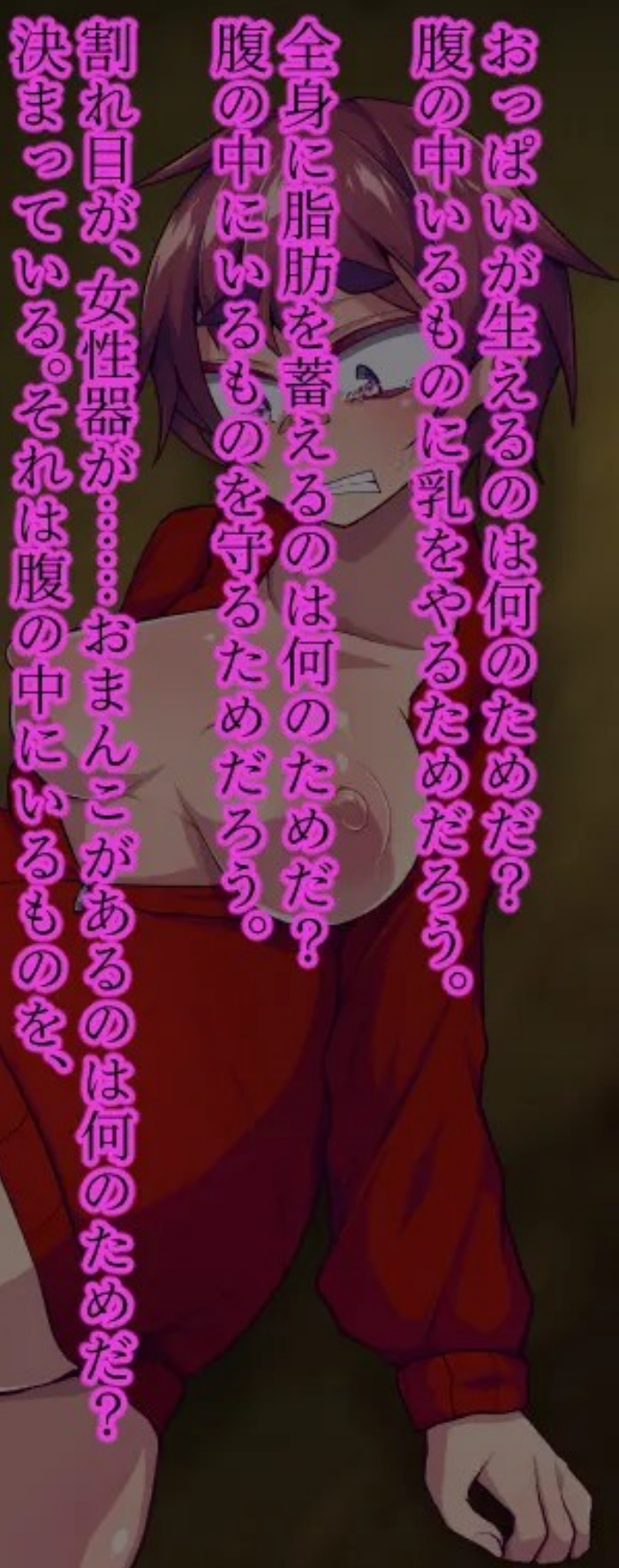
男性器などはとうに消え失せ、代わりに股の間へ裂け目が生じ始めていくことが感覚で分かる。

極めつけはこの乳房だ。

豆粒みたいだった乳首がやがておできのように腫れ上がっていて、

気が付いたらその皮膚の内側にむくむくと脂肪が寄り集まって

みちみちと膨れ上がり始めて……



おっぱいが生えるのは何のためだ？
腹の中いるものに乳をやるためだろう。

全身に脂肪を蓄えるのは何のためだ？
腹の中にいるものを守るためだろう。

割れ目が、女性器が……おまんこがあるのは何のためだ？
決まっている。それは腹の中にあるものを、

ものを、

ものを――

我が子を無事に産み落とす。
そのためにはある。

あ
あ

はあ

はあ



はあ
恐怖が心を支配していった。俺が俺でなくなっていくことへの恐怖だ。
俺はいま、男から女へ……産ませる側から、産む側へとなりつつある。
自分の身体が全く別の存在へ変貌していく光景を目の前で見せつけ
られて、全身でそれを感じ続けて、そして俺の中から響く声は今も俺に
魔女になることを懇願している。

頭がおかしくなりそうな絶望を前に——けれど、何故だろう。
恐怖に満ち満ちた俺の心の奥底にただ一滴、ほんのわずかな高揚が
滴り続けている。

それは地下壕の隅で己の高ぶりを慰めながら、熱っぽい視線で俺を
見つめ続けている悠馬の存在だ。
俺の変貌を見守るその表情は喜びに満ち溢れている。

その全身を振るわせて自慰に励む姿はこれ以上なく気持ちよさそう
だった。熟れた肢体が快感に打ち震え、蜜と汗と涎を垂れ流しながら
愛おし気に己の孕み腹を撫でさすり、やがてまた自らの股に咲く花卉へ
手を伸ばしている。

自分という存在が変わり果て消えてしまっそうになっている
まさにもその渦中であるというのに、俺はそんな目の前の悠馬の肢体に
見惚れて視線を外せないでいた。

羨ましいと。

あ？

あんな風になりたいと。

あんな風に……気持ちよくなりたいたんだと。

俺も、俺も熟女に、

熟女に――



俺はすっかり大きくなってしまった孕み腹を見下ろして、溜息をついた。

悠馬とお揃いだ。俺も熟女になった。俺もこの子を産める身体になった。

腹の中の子が蠢いている。なにを願っているのかも分かる。

彼らは産まれたい。

この世に生まれ落ちたい。

かつてこの世に生まれ落ちることの出来なかった魂たちが、俺たちの胎に縋り付きながら泣いている。

この子たちみんな。

俺たちみんな。

この土の下に眠り続ける魂たちはみんなみんな、もう一度この世に産声を上げるその時を待ちわびているんだ。

七三三...

そのためには——もっともっと、熟女が必要になる。

その胎に孕んだ魂たちをしつかりと健康で頑丈な生きた肉の塊としてこの世にもう一度産み落とす——そのためだけに特化した、雌肉の塊のような存在が、たくさん要る。

おんなも、おとこも。

かぞくも、ゆうじんも。

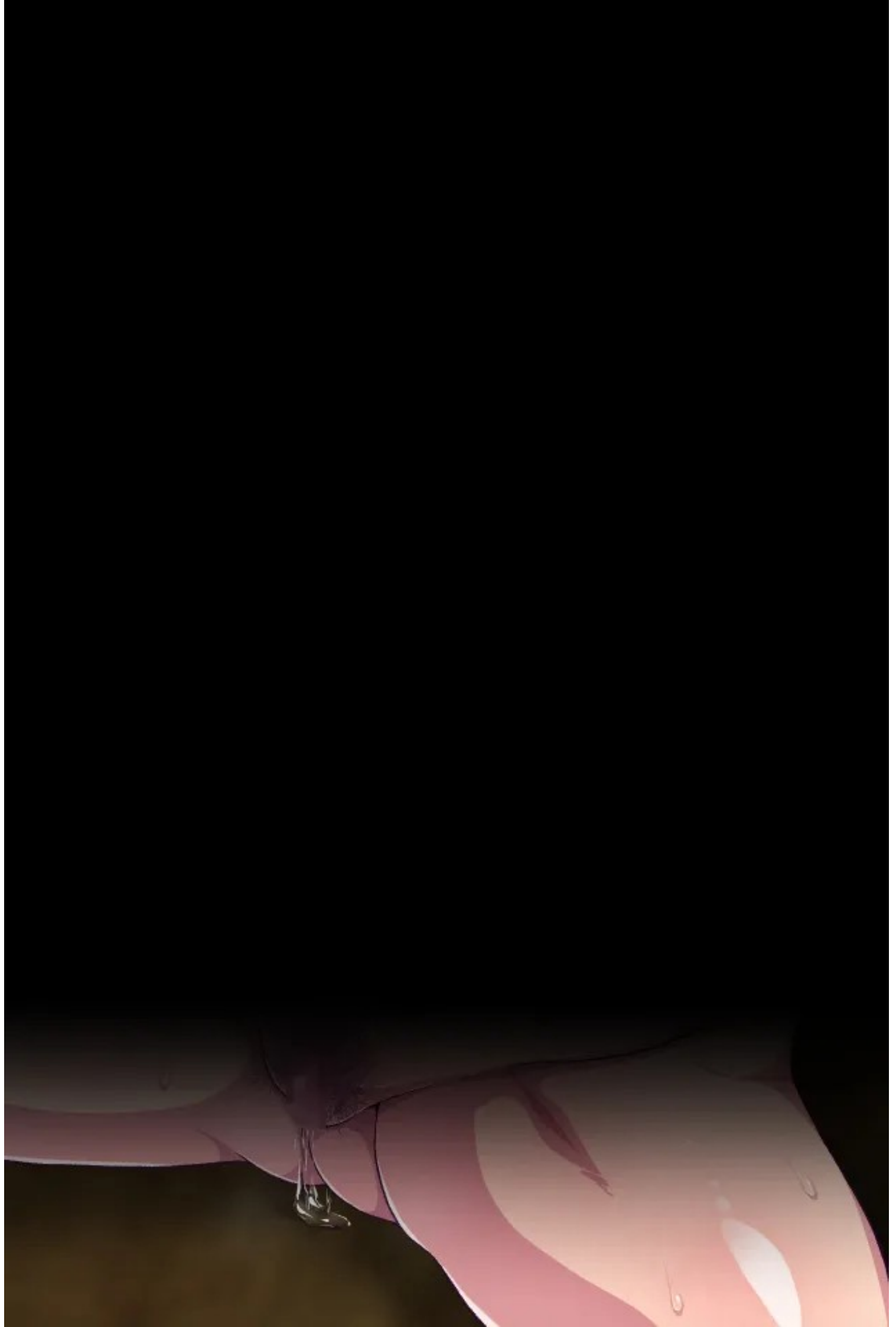
しりあいも、たにんであっても。

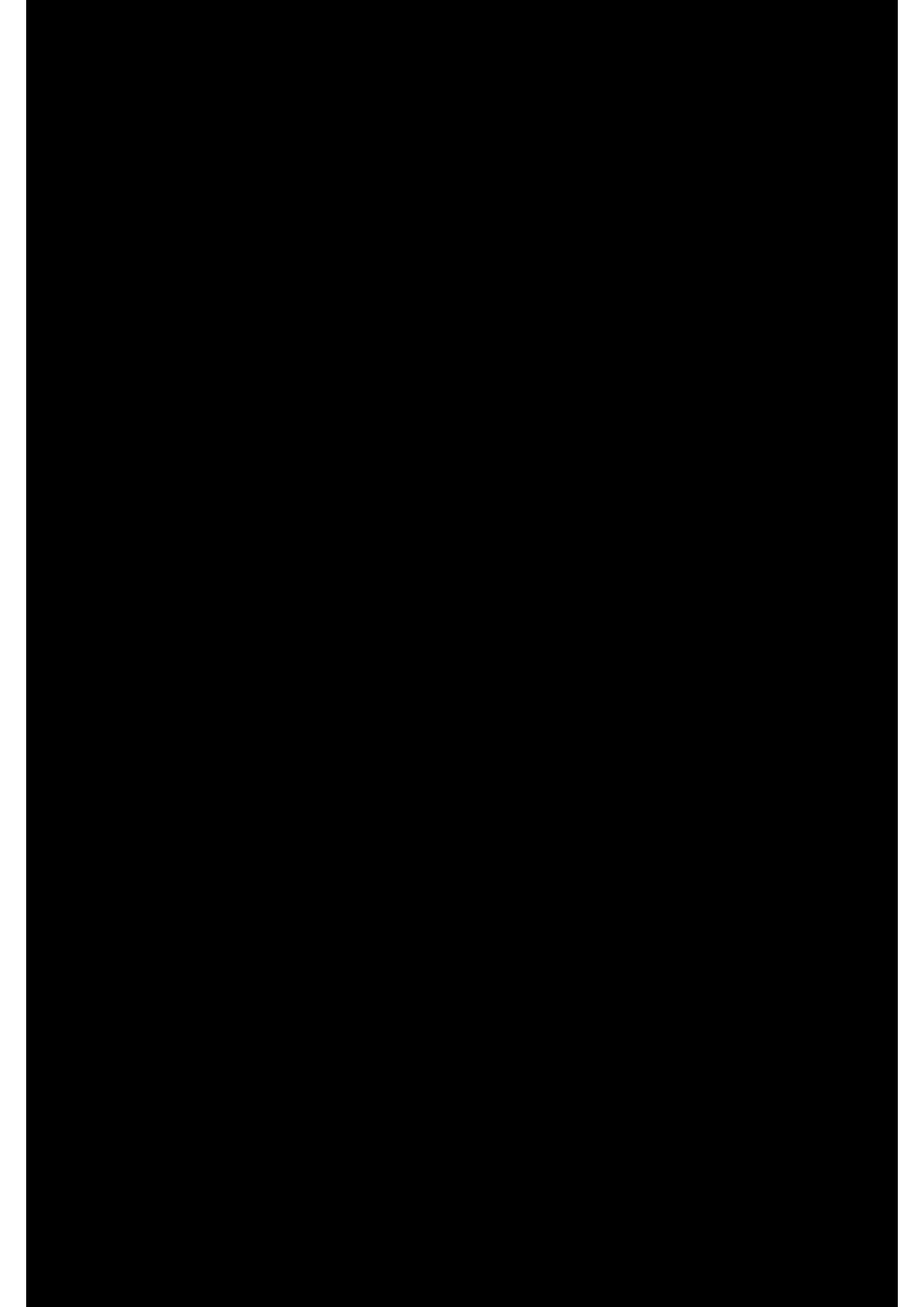
老若男女生きとし生けるものみなすべからくこの子らを孕み産むための、

魔女ニ。

お前モ、お前らモ、ミンナ、魔女ニ——

十三...






「悪いが——そうはさせん」

ぎやーてくら ぎやーてくら
はーらーぎやーてくら……

はらそうぎやあてい
ぼーじーそわか……





羯諦

羯諦

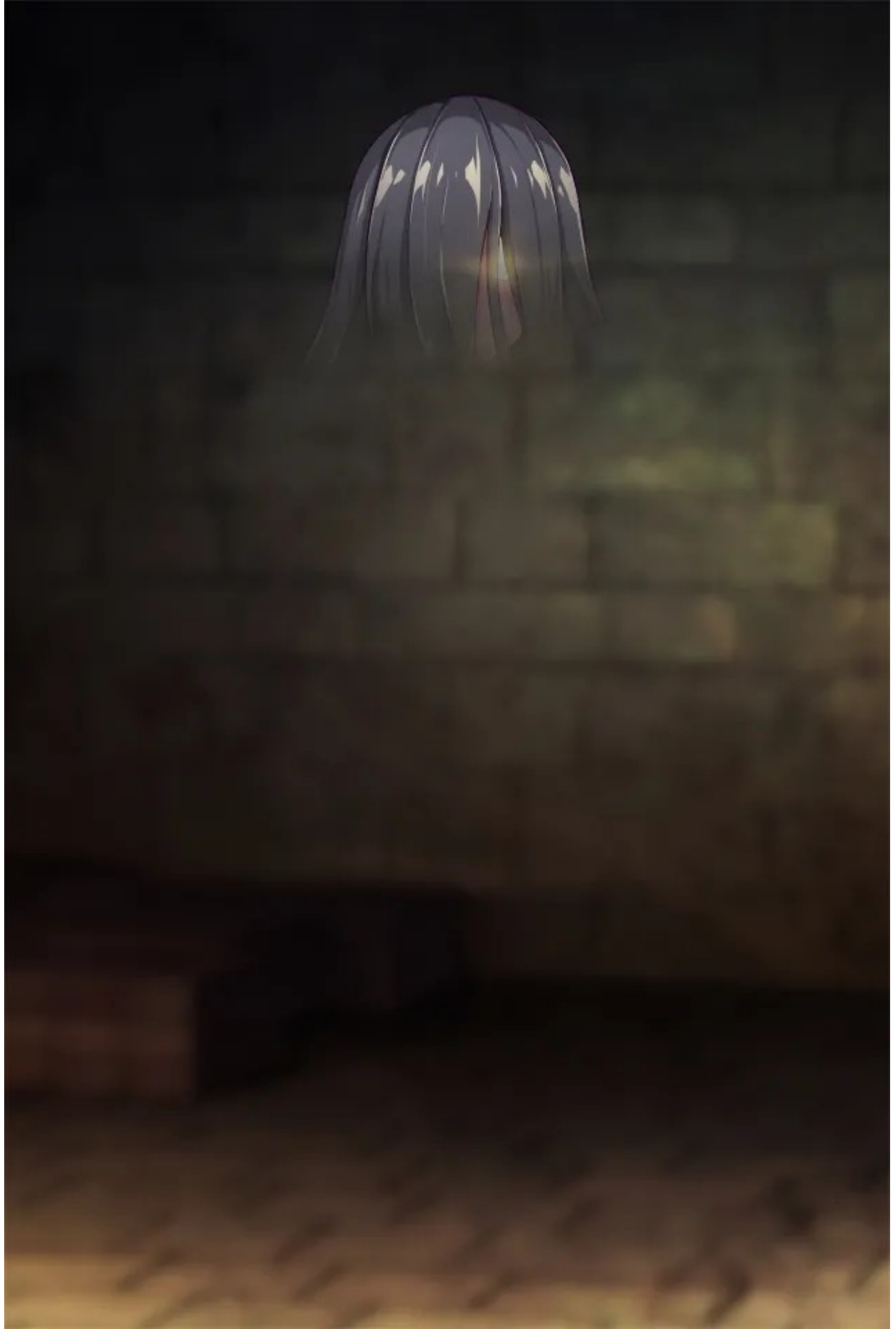
波羅羯諦

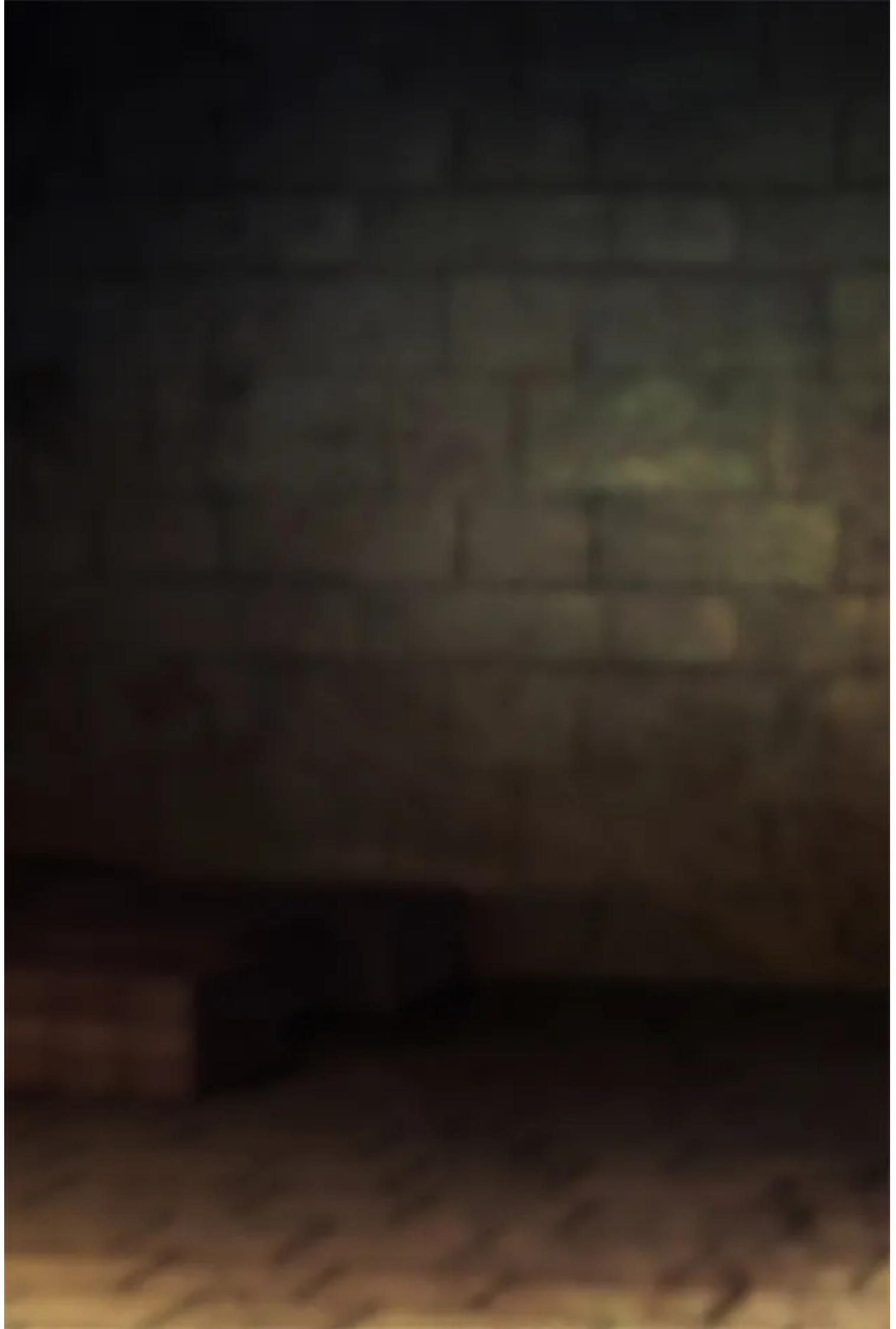
波羅僧羯諦菩

提薩婆訶









俺は目の前で起こったことがまだ理解出来ないでいた。
俺たちの大きくなつたお腹から溢れ出した……なんだろう、例えるなら
靈魂のようなものが……この男のヨートの内側へと消えて行く光景を、
呆然としながら眺めているしかなかった。



一方で、俺の身体は……

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

んんん

んんん

んん

んん

んん





……俺の身体はいまだ熟女と化したままだったけれど、さっきまで熱に浮かされたようだった頭の中は、まるで深い霧が晴れたかのようにすっきりしていた。

今にも中から何か生まれ落ちんばかりに膨らんでいたお腹の圧迫感はずっかり薄れていて、俺の頭と思考をすっかり支配していた狂った欲求もどこかへと消え失せていた。

……もつとも、異様な妊娠で限界まで引き伸ばされていた

下腹部の皮膚はだるだるに垂れ余り、内側にこびりついていいるであろう皮下脂肪と合わさって、服の下へ到底収まりきらない程にだらしなくせり出してしまっではいるけれど——

多分



「……先に言っておくが、元の姿に戻れるとは期待するな」

男は己の仕事を指して、**祓己探偵**(はらみたんてい)と名乗った。

「キリスト教の概念で、**辺獄**(リンボ)というものがある。

洗礼を受けずに死んだばかりに天国の門をくぐる資格を持たない、幼い魂たちなどが辿り着くとされる場所だ」

「お前たちを襲った霊は、その**辺獄**に似た場所から来た。

名は無いが、その性質から俺は**熟女苦界**(じゅくじょくがい)と呼んでいる」

「輪廻の渦に戻りたいと願う魂たちがその**熟女苦界**からやってきて、

人に憑りついて**熟女**に変えてしまう事件が頻発している。

きつと母親に似た女性を求めてのことだろう」

「だが、仮に産まれたとしても大抵は魂の宿らない水子か蛭子で、

しかも憑りつかれた人間が死ぬまで同じことを繰り返す。

だから、俺が来たんだ」

そういう悪い霊を祓ってまわっているのか、と俺は尋ねた。
すると祓己探偵は首を横に振って、コートの前をはだけ、言った。





赤

キ

。。。

ムキ...

ぽよん

がよ...

ムキ...



「俺が正しく産んでやるんだ。

大抵の場合長生きは出来ないが、しっかり供養してやれば
輪廻の渦に戻すことは出来る」

「悪い霊なんていない

悪い結果に繋がるほどに、苦しんでいる魂がいるだけなんだ——」

そう言い残して、祓己探偵は去っていった。

あの人は俺たちの身体を元に戻してくれたり、はしなかつたけど、
今後の人生を決めるうえで、の指針となるアドバイスを残してくれた。

ひとつ。俺たちが知らないだけで、こういう事件に巻き込まれて熟女になっってしまった人は多いらしい。

熟女の身体から湧きあがるこのとめどない性欲は、もうそういうものとして受け入れるしかない。だから、一人孤独に事件に巻き込まれて熟女になった人たちと比べれば、事情を知って愛し合える相手が居る俺たちの境遇はむしろマシな方だったこと。

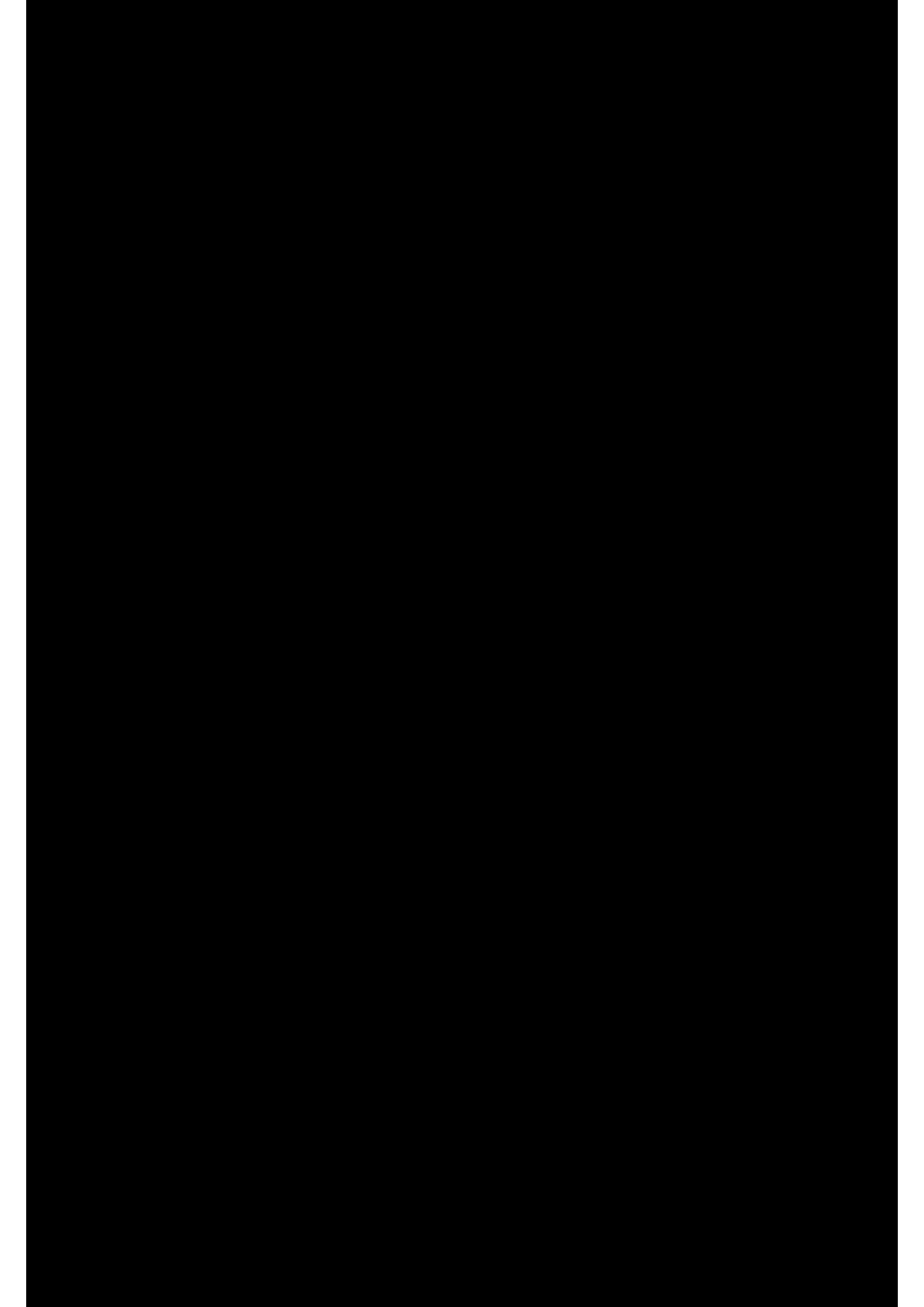
ふたつ。いつか俺たちが人生に迷うことがあれば、こういう働き口も世の中にはひっそりと存在しているという事実。

つまり、霊を鎮め、霊を孕み、人として産み落とすことを生業とする、不思議な連中——祓己探偵という集団のこと。

俺たちは貰った名刺を大事に取っておくことにした。

もちろん、俺たちがいつかこの肉欲を自制出来る人間に成長する可能性は残っているけど——少なくともいまは、そんな未来を想像することすら難しい。

だったら、人生の選択肢は多いほどいいだろうと思ったんだ。







ふがつ？

フ。

フ。

フ。

フ。

フ。

フ。

フ。

フ。

フ。


フ。

パチッ

………また、
あの頃の夢か……

ふ……





……本当に……
ぜんぶ夢だったたり
しねえかな……

この布団を
はぐつたら……
ぜんぶ元通りに……

バサッ

んなワケねえか…

△/△...

△/△...

△/△...



いつも通り
身体は重いし…

アッ…

ヒュウ…

この乳のせいで…
寝返りもうちづら…

アッ…



.....

Shin...

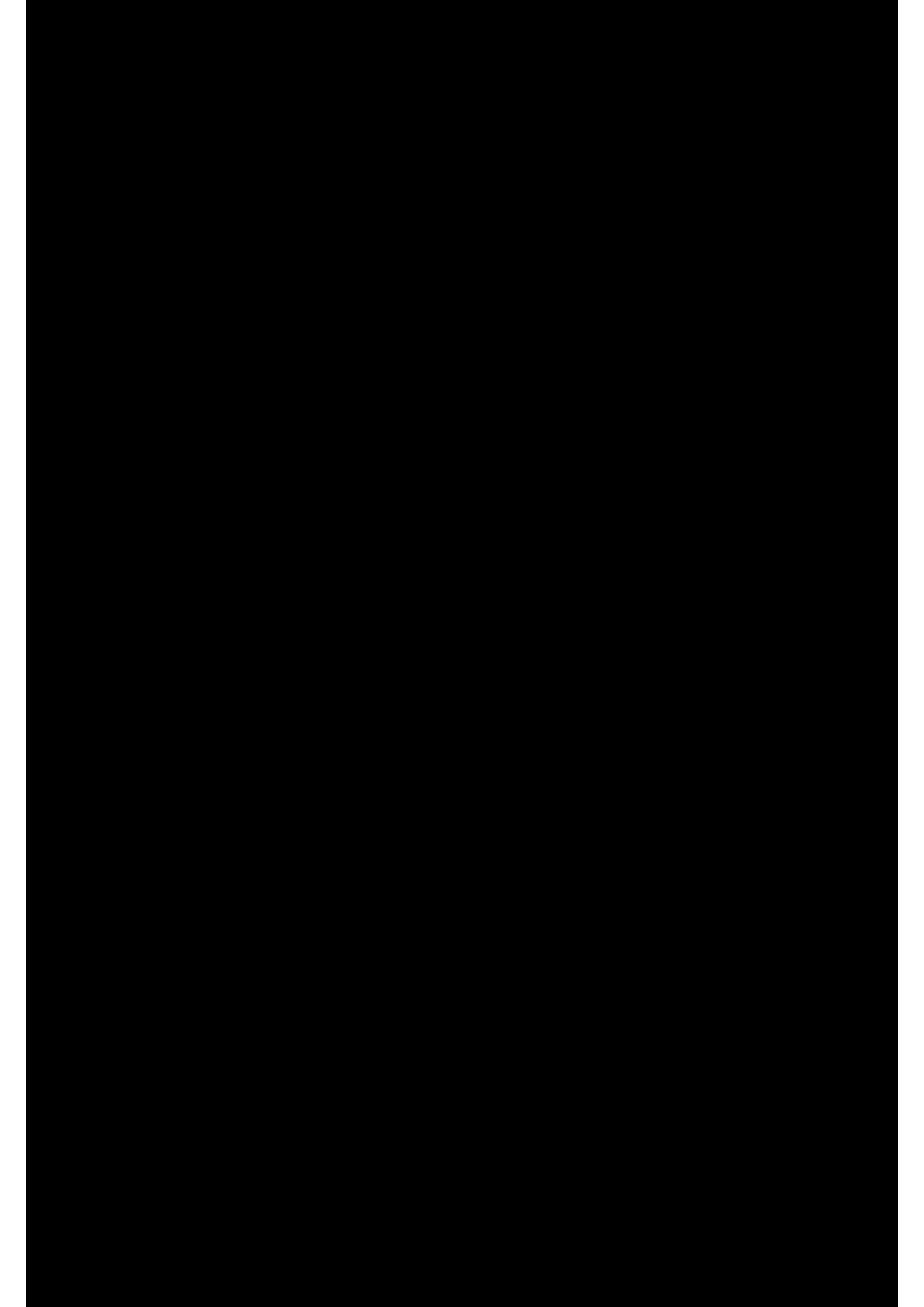
Huu...

Ara...



k_soo

汗っ



がつ…
学校…！

アッ
ッ
ッ

ピョッ

ピョッ

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

遅れちまう…
のにい…！

手えつ…
止まんね…

ピョッ

ピョッ

フッ

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

くちゅ…

おおおおお
おほおおお

今日も夢を見た。

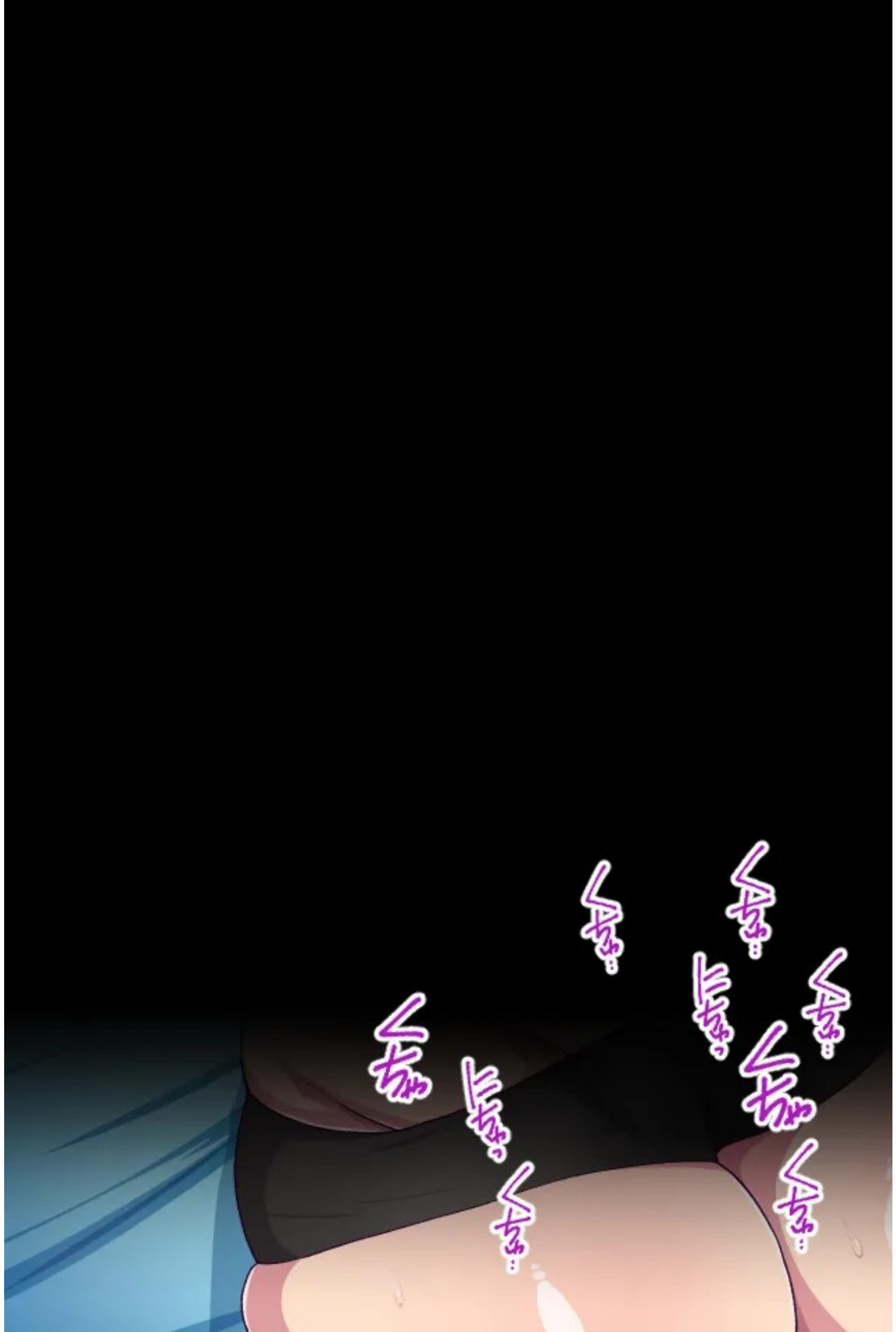
熱に浮かされたように、俺は俺の身体を確かめる。

一度火が付けば止まらないと知りながら、全身へ燃え広がる快感に身を任せる。

衝動のままに手を動かすたび、無限に思えるような快樂の波が次から次へと押し寄せて俺の精神を押し流していく。

遠くへ、どこか遠くへ……

この世から遠く離れたどこかへ、波に揺られるように、たぷたぷと。



そういうわけで、俺たちの身体は元に戻らなかった。

同じ困難をその身に受けた結果なのか、俺と悠馬が愛し合う時の熱量は以前より増したと思う。

けど俺たちの身体の状態が周りの人間に認識されないという状況もそのままなので、少なくとも表面的には俺も悠馬も特に変わっていない。

俺たちは熟女のまま年を越し、熟女のまま進級し、熟女のまま次の夏休みを迎えた。

この生活の中で特に不思議に思う点は、俺たちの異常な行動や状態を周りの人間が正常に認識できないという点だ。

人前でふとムラムラして自分の身体をまさぐってても、衣服をはだけてオナニーをおっぱじめたとしても、誰も何も注意しないのだ。

祓己探偵はこの現象について……一般の人たちは熟女苦界によって

歪められた事象を認識出来ず、無意識化で勝手に整合性の取れるような認識を構築してしまう……だとか何とか小難しいことを言っていた。

つまり熟女苦界の存在と何らかの形で関わった人間でないと、俺たちの肉体や、それに由来する行動の異常性は認識出来ないのだそうだ。



寂しく思わなかったわけじゃない。

俺たちが往来でどんな痴態を繰り広げようが、誰もそのことに気付かない。

俺たちの姿が見えていないわけじゃないが……
なんとというか、『何の問題もないように思う』らしいのだ。

それは例えるなら、異世界に迷い込んだようなものだ。

俺の名前や身分は元の世界に残っていて、家族や友人たちはみんな

『そっち』の俺を見つめている。一度熟女苦界に取り込まれ致命的に変貌してしまっただ心と身体は、もはや元の『カケル』の形をしていない。

この矛盾がやがて今よりもずっと大きくなった時……この世界から『カケル』という人間はいなくなる。

誰もがカケルとユウマという人間が居たことを忘れる。

仮に忘れなかったとしても、気にしなくなる。

あとには二人の熟女が残る。名の無い熟女が。

祓言探偵――

あの不思議な力を持つお兄さんのことは分からないことだらけだが、
一つだけ、もしかしたら………と思いついた事実がある。
彼から貰った名刺には、個人を示す名前が記載されて無かったのだ。



あるいは、彼があのような仕事に就いたのも、俺たちと似たような境遇が
理由なのかもしれない。

何の根拠もなく、そう思った………





益体の無いことを考えながら時計を見ると、完全に遅刻の時間だった。

けどこの前同じようにオナったあと寝過ごして三限目くらいに登校した時もちよつと忘れ物したぐらいの怒られ方で済んだし、なんかもう俺という存在のステルス性はほとんど無敵なレベルにまで高まりつつあるのをひしひしと感じる。

このままサボって一日オナって過ごしてもいいんじゃないかなろうか。どうせ誰にも咎められ……

ふ……

いや、悠馬が怒るか。

しかも学校をサボったことに怒るんじゃないやなくて、休み時間に性欲解消を
行い合う相手が居ないことに対して怒る。
たぶん。


世ッッッ:

最近気付いたんだが、人畜無害そうな顔して悠馬の野郎かなりの変態だ。

俺だって最初はこの熟女の身体から湧き出る無限の性欲に苦しめられたけれど、いつでもその場で処理して大丈夫だっていうのならそれほど生活に支障が出るわけでもない。

だってのに、悠馬は俺が近く居るときかならず俺にナメクジみたいな絡み方してねちっこく責め立ててくるし、それで俺が絶頂する姿を眺めて自分もイってやがる。





ちんちんを無くしてからというものの、もっぱら悠馬の方が俺を責め立てる側で、逆に俺は悠馬のテクにヒイヒイ言わされる側に終始している。しかも悠馬の奴は最近ピアッシングに興味があるらしく、自分だけでなく俺にまで一緒に穴開けてみないかと提案してくるのだからたまらない。

このままでいいのだろうか。こんな調子じゃ、一か月後には街中で露出プレイとか無理やりつき合わされそうで怖い。

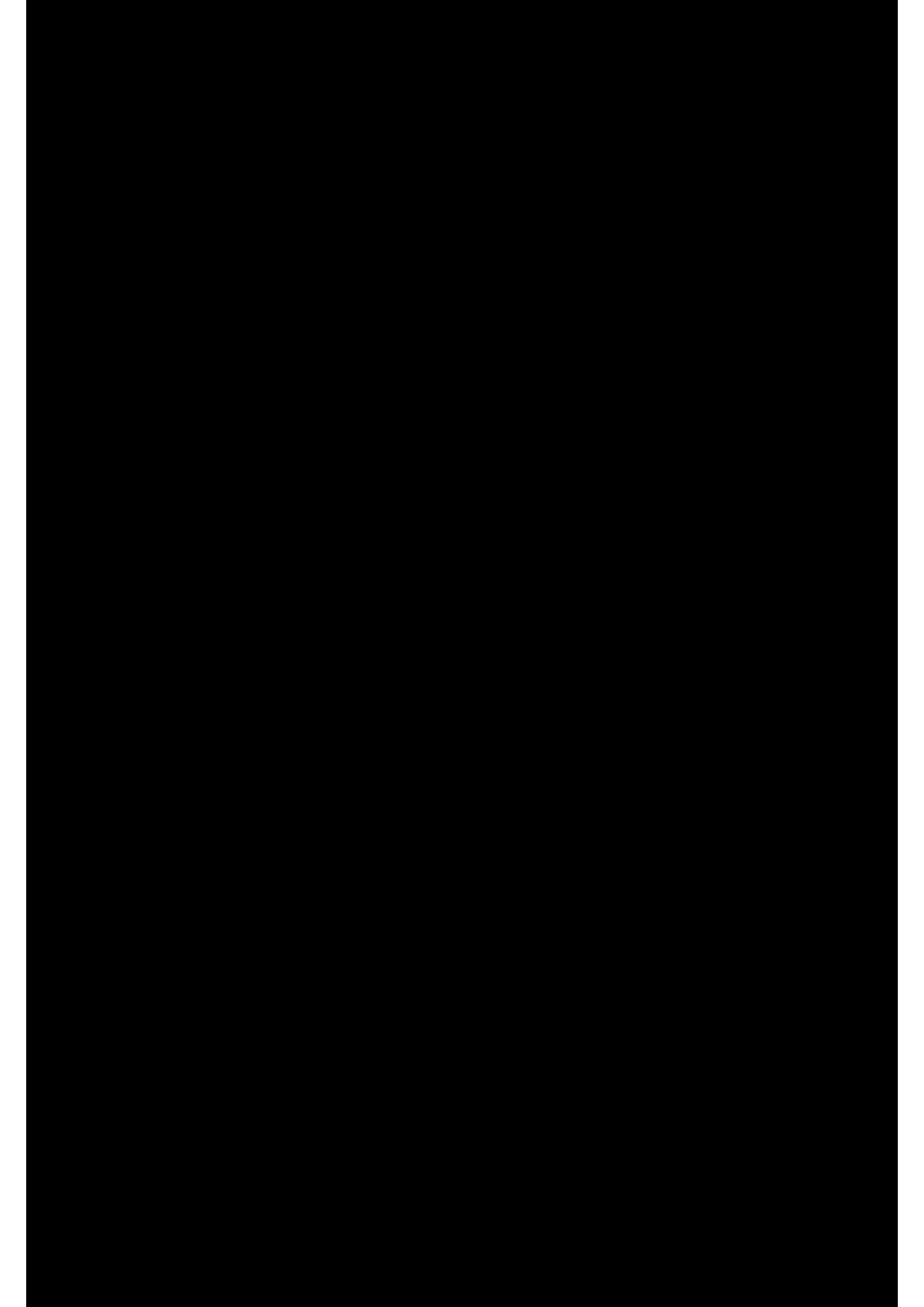
.....怖い、のだが.....



……そんな恐ろしい光景を想像するたび、心のどこかで少しドキドキと恐怖以外の感情が芽生え始めているあたり、俺もあんまり悠馬のことを悪し様には言えないかもしれない。

……まあ得てしてこういう想像ってのは杞憂に終わるものだ。
流石に悠馬もそこまでエスカレートすることは無いだろう。





ガッパ

ガッパ

ガッパ

ガッパ

ガッパ

ガッパ



「翔っ！ ほら、もっとお尻を振って媚びるように歩かないとダメだよっ！
じゃないと後で可愛がってあげないからね……！」

俺は悠馬の命令にキャンと鳴きながら精いっぱい下品に身体をくねらせながら歩き続ける。

周囲の通行人の怪訝な視線が心地いい。パトロール中の警官が不審そうな目でこちらを眺めているが、呼び止められないということとはせいぜいその程度の戯れにしか見えていないということだ。

俺たちの痴態を邪魔するものはどこにもいない。

母親の筆筒から拝借してきた過激な下着を身に纏い、全身を卑猥にデコレーションした姿で雌犬みたいな痴態を晒す。

それでも周りから投げかけられる反応はやんちゃ坊主たちの戯れをうっとおしがる程度の視線がせいぜいなので、俺たちはもっともっと過激な遊びに傾倒していく。

ガキ

トキ

カッパ



カッパ

アハハハ

アハハ
アハハ
アハハ

アハハ
アハハ
アハハ

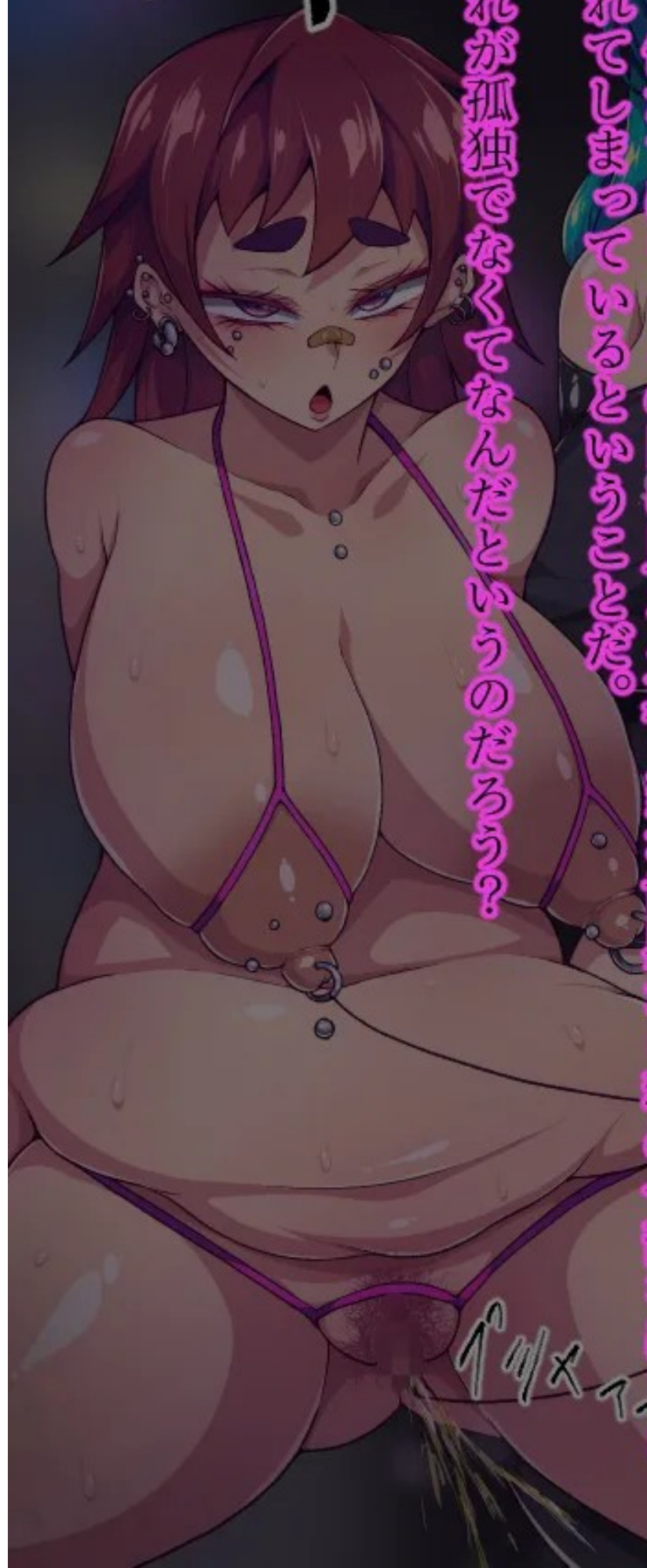
こんな楽しそうな悠馬の顔を見るのは久しぶりだった。
俺は嬉しくて嬉しくて、思わず犬みたいに小便を漏らす。

そのまま試しに通行人にすがりついて腰をカクカクと振ってみる。
それでも周囲の反応はたいして変わらない。

そんな光景を目の当たりにするたび、俺たちの心には全能感と孤独感が
同時に襲ってくる。何をやっても周りに影響を与えられないというのは、
つまり俺たちはもうこの目に見える真っ当な世界から魂の一部をはじき
出されてしまっているということだ。

これが孤独でなくてなんだというのだろうか？

ガッ



イキイキ

俺たちは互いに互いを唇をついばみながら、貪るようにその孤独を
回の中で愛撫する。
唾液と共に嚙下して、吹き上がる潮と共に心の中から吐き出していく。
俺たちはもはやそういう世界で生きている。

んむ……

もぐ…
びゅ…

ん……



世界に取り残されてしまった孤独を毎日のように実感し合っては、
ただただ溺れる者が抱む藁束のように、互いの身体と心を求めあい続ける。

きつとこれから——ずっといつまでも。



アッ

ア
ア
ア
ア
ア

——「お前も魔女に」

あの言葉は呪いだっただのだろうか。

俺たちへ吐きかけられた魔女という言葉の意味が、その語源と同じく

「他者をたぶらかす者」というニュアンスだったならば、そういうことになる。

心無い言葉を吐きかけられながら地下に囚われた女性たちの怨嗟、
同じ地獄に沈めと叫ぶ悲痛な叫びに他ならない。

けれど——



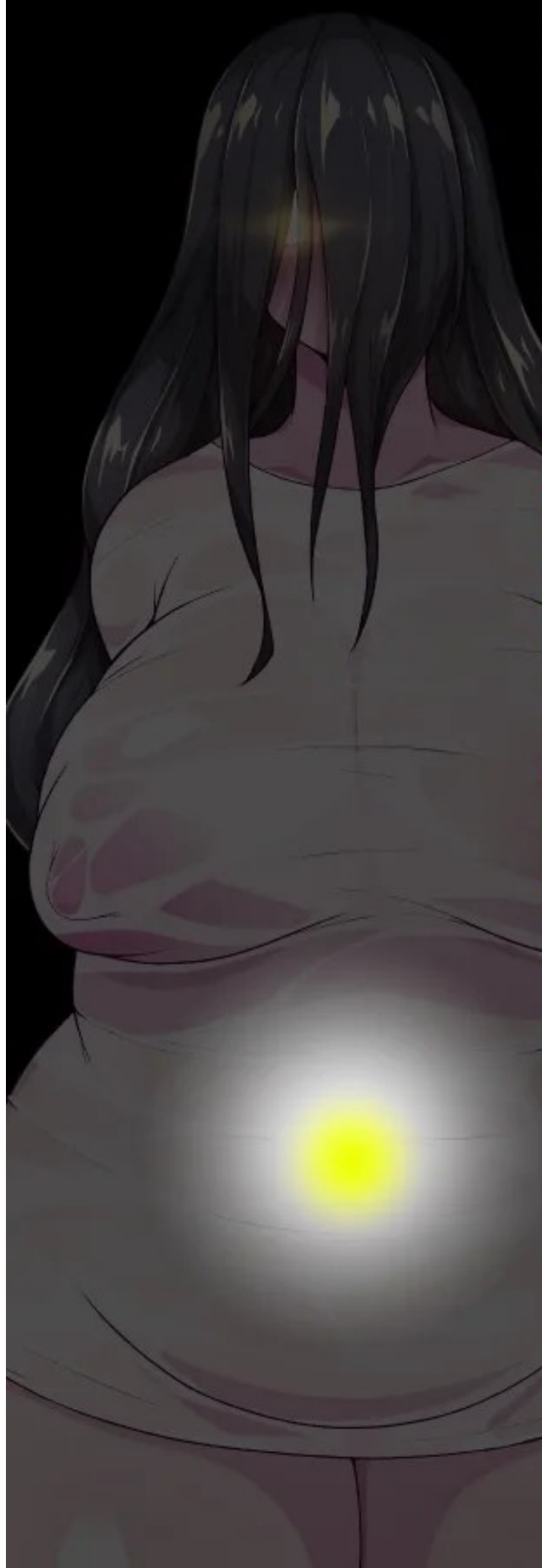
——けれど、あの霊の正体は地下壕で犯されていた女性たちではなく、その胎の中で生まれながらにして死した魂たちだという。

ならば、その意味合いはまったく違う物になるのではないだろうか。

男たちから吐きかけられる蔑称を胎の中で聴いていた無垢な魂たちは、その言葉の意味を誤解したのかもしれない。

己を胎に宿す生き物の名を、「魔女」と。

そうだとするならば、あの言葉の意味とはすなわち——



お母さんが…
恋しかった…
の、かな…

© 000000





あまりにも突飛な発想。ほとんど妄想と変わらない仮説。虚言妄言……

しかし、そうであって欲しいと願うことは愚かな行いだろうか。

己の母になって欲しいと願う言葉が、侮蔑を意味する語句を孕んでいることにどうにも違和感を覚えるのだ。

もつとも、それを確かめる方法などものはやはりはしないのだろうか。



わざわざそんなことを思い出して考える理由というのは、たまたま夢の中で男だった頃の自分や悠馬の幻影と出会うことがあるからだ。

彼らは愕然とした表情で変態熟女と化した未来の自分を見つめている。しかし今の俺たちにとっては、その視線すら心地よい。

俺たちは立ちすくむ過去の自分に下品な足取りで歩き寄って、カリカリにとんがった乳首を口の中にそっと差し入れてやるのだ。



すると過去の自分たちは泣きながらむしやぶりついて、一心不乱に母乳を吸い始める。

俺はぱんぱんに張った乳房が小さな手に揉みしだかれる痛みと快楽に身をゆだねながら、ほんの僅か自分の心に湧き出した満足感に浸り続ける。



キョッ
キョッ

キョバツ

理屈立って理解しているわけじゃないが、分かる。

この夢に出てくる過去の俺はきつと、俺自身の後悔の念であると同時に、この異常事態を引き起こした怨霊の……その想念の残滓とでも呼ぶべき物なのだろう。

怒りや、妬みや、こうなるはずじゃなかったという、やりきれない想い。そういうものが渦巻いて、俺の乳首を噛み潰す。

俺はその痛みすら心地よさに変えて、恍惚とした溜息を漏らす。

これが母性？

分からないけれど、今となってはこの魂に愛しさすら覚える。哀れにも思う。救われて欲しいと思う。

そのために、俺の人生はきつとあり得ない方向にハンドルを切ってしまった。ているのだけれど、それについて恨む気持ちは不思議と湧いてこなかった。



俺はいま悠馬と愛し合えて幸せだし、人生万事塞翁が馬なんて諺もある。少なくとも現在が幸福であるならば、必要以上に過去や未来を嘆くべきじゃないと、俺は思うことにした。

それはきつと、こんなはずじゃなかったという怨念を積み重ねてしまうことに繋がることだから。

人生は後悔の連続だ。

これで良かったのかは分からない。

むしろ良くない可能性の方が高い。

少なくとも、ごく一般的な人生とは言えないし、それはもう望めない。

けど、人生に起こる大きな出来事なんてものは、災害のようなものだ。

その出来事によって苦労や災難を被ることもある。

そのきつかけには、たしかに自分の選択も関係しているだろう。

例えば悠馬が裏山に行かなければこんなことにはならなかっただろうが、俺はそれについてももう考えないことにしている。

だって、だれがこんな事態を予測できる？

ごく当たり前に日常の中に存在していた裏山に遊びに行ったら、身体も心も今後の人生も何もかも変わってしまったなんて、分かるはずがない。

完璧な予測なんてものは、どんな人間だって無理だ。

予測を試みることは出来ても、いつだってその予測は当たり外れの可能性が混在した霧の中で揺れている。

だから、この結果になってきつと俺は良かったのだ。

俺にはそう思い込む以外にないのだ。

俺はかつて友と呼んだ男を愛する以外の道は存在しないのだ。

……そう繰り返すしかないのだ。

だって、たまにどうしても考えてしまう。

どうして俺はあの時あの教室で——
熟女と化した悠馬の身体の異常を
認識することが出来たのか。

地下壕で豹変し、俺を熟女に変えた決定的な瞬間の悠馬の顔が目には浮かぶ。俺に焦がれるような瞳。正気ではない振る舞い。明らかに霊に憑依され、その意識を操られていたとしか思えないが――

――操られていたのは、いったいいつからだ？

地下壕に近づいたから？ それとも……はじめから？



思い返すと、悠馬はたまに俺を誘惑するような行動を取ることが
ままあった。それは熟女化による性欲過多のせいかと思っ
ていたけど……
それだけじゃないのか？

俺が悠馬の熟女姿を認識出来たのは——はじめから、俺を標的にしていた
から、なのかもしれない。

もちろんそれは、あの熟女苦界の怨霊による思考の誘導があったの
だろう。
そうでなければ、友達をこんな風に巻き込むものか。悠馬はそんな奴
じゃない。悠馬は悪くない。悠馬は——



だけど、たまに思う。
俺がもしも、悠馬と、友達じゃ、無かったなら——

……そこまで考えたところで、ドツポにハマり込んだ思考を取りやめる。
これ以上のこのことについて考えることに意味はない。
だって、俺の世界にはもはや悠馬しか残っていない。

ふたり仲良く過ごすための未来に、こんな後悔を抱えて行くべきじゃない。
そんなことぐらい分かっている。分かっている、けれど――



——けれど、もしかすると。

今これから育もうとして、いるこの関係性すらも、いつか未来においては何らかの後悔の源になるのかもしれない。

何もかも逆転した価値観のもと、熟女と化したこの人生を恨み妬み怒りその他諸々の感情に翻弄される時が来るのかもしれない。

だから俺は努めてこう思考し続ける。人生なんてそんなものだ。

いつか来るかもしれない災害のことについて想像力の限り備えることは出来るけれど、災害そのものに巻き込まれることを避けることは出来ない。この地上に災害という概念が存在する限り、それは万人に降り注ぐ可能性を孕む霧だ。

だから……それについて必要以上のことを考えることは止めよう。たとえそれがどんなに難しいことであっても……そう努めようと思う。

巻き込まれなかったイフなんてものは存在しない。

俺にとってこの生涯はいつだって唯一無二にして最高の人生だ。

だから。

おやすみなさい、後悔に塗れた過去よ。

俺はこの幸せな現在に浮かびます。

毛ソ...



んん…
どうしたの？
ニコニコして…

いや…
なんか、懐かしい
夢を見てさ…

モソ…



…なあ、今度さ…
海行こうぜ、海…

海？
僕、小さい頃一度
行ったきりだよ
泳げるかなあ…



大丈夫だって…
去年、プールで一緒に
練習したろ？

あの時みたいになさ…
宿題も夏期講習も
何もかも忘れてよ、
一緒に……………

流転する悦楽のゆりかごに身をゆだね。

俺
僕らは夢に悔いを見る。

じゆく
じよ
か
熟女禍

く熟女にされた俺たちはく

当サークル作品の無断転載を
禁止いたします。 ※例外あり

Do not use my works
without my permission.

※例外

Twitterとかで漫画のコマやページの一部をツイートしてその内容について感想言ったり文字コラで大喜利始めたりする流れを最近よく見かける気がするんですが、個人的にはああいった形の転載であれば楽しいし宣伝になるので当サークルの作品に限ればOKです。

よかったらリプ欄に販売ページのリンクとか貼ってくれてるとさらに嬉しい♡

↓こういうの



誰このおばさん @zettaini_yurusanaaiyo

そうはならんやろ

#熟女禍 #ハラショウギヤアテイ



14

51



けど性器が描かれたページは作品の生命線なので転載不可です。ただし無料サンプルとして公開してる範囲ならOKです。

もちろん本編CGやイラストを全部・あるいは大量にアップロードして不特定多数の人が読めるようにするなどといった違法視聴を促すような行為は楽しくないし売上落ちるので完璧にダメです。節度を守って楽しくシコってね！ちなみにこの画像は転載OK。

※上記の『性器』の範囲にはモザイクや黒線処理済みのものを含みます。

※例外の基準は予告なく変更される場合がありますが、その時はどこかで告知します。

2020年12月記/同人サークル ハラショウギヤアテイより @hara_gya_te



第一章
写真の中の女は
年をとらない



第四章
いずれ劣らず
残忍で



エピローグ
あまりの罪深さに
口を閉ざす



第二章
葬られた時間/
熱に浮かされた夢



第五章
危険の中で
激しく愛してくれ



第三章
聖なる誓いを
裏切った



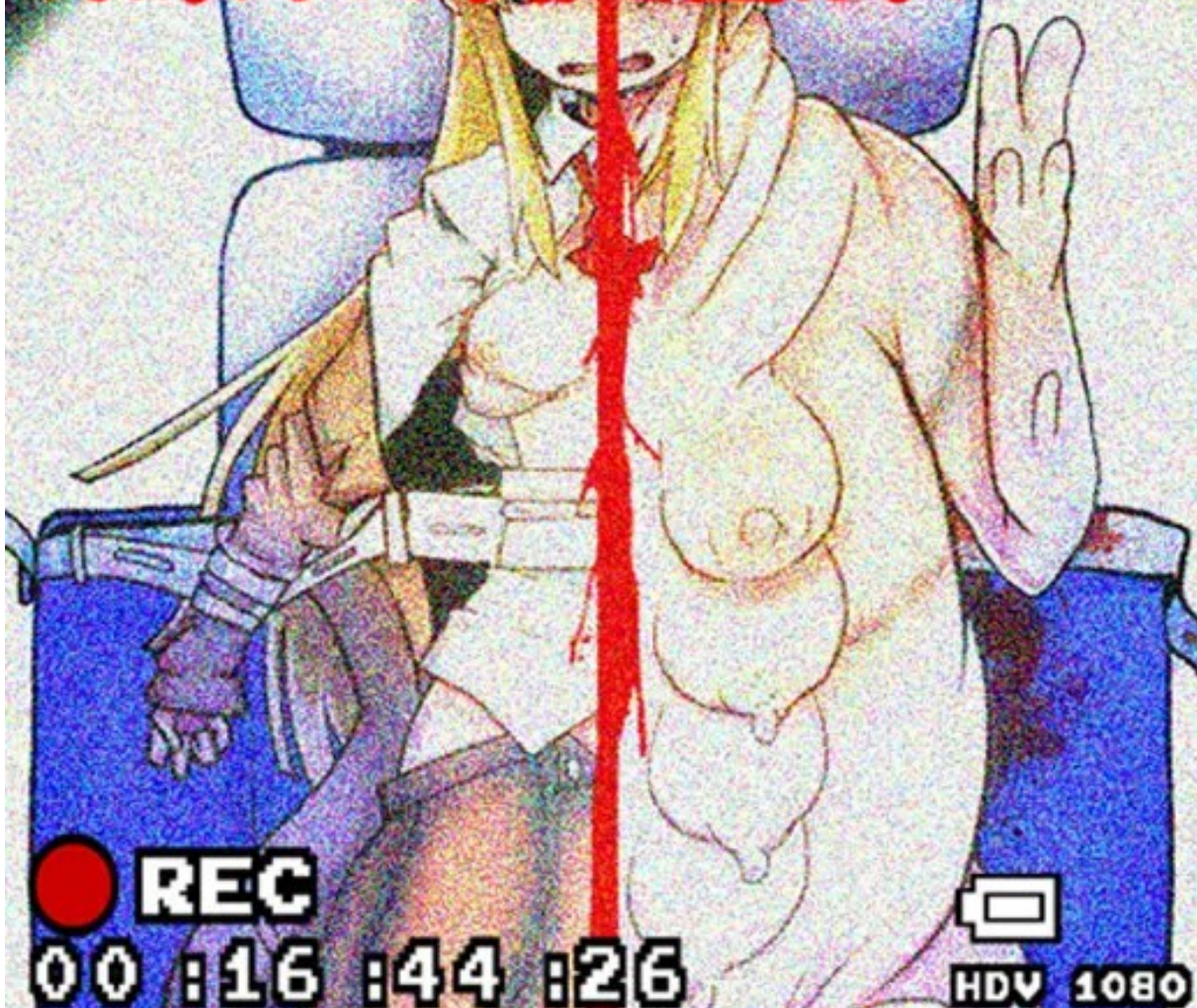
第六章
ぐるぐるまわって
落ちていく

「全ての民が**熟女**と化したこの世界に
残された**希望**はただ一つ」
「異世界の男性——その精子なのです——」

クトゥルフTRPG 人体改造リプレイ

換骨奪胎

クトゥルフTRPG 人体改造リプレイ



換骨奪胎



『TRPG』って知ってるかな？
会話 (Talk) で進むRPGで……



『リプレイ』はその記録ですね
様々な資料も添付されてるわ



『マップ図』で状況を確認だ
屋敷の中は危険だからな……



『挿絵イラスト』も掲載よ
うう、フクザツな気分……



『バッドエンド』ハ 3種アル
コンナ結末モ 面白イナ……



発売中

ヘッドスワップ ホテル

ヘッドスワップホテル

-恋人たちのコウカン人生-



発売中

恋人たちの コウカン人生

キ印シリーズ



発売中!!













































































































































